

*The Fulbrighter
in
Nagoya*

No.29

February 2020

Nagoya Fulbright Association

The Fulbrighter In Nagoya No.29

目 次

第1章 特別講演

近江 誠 南山短期大学名誉教授

「フルブライターとしての「社会的発信」：フルブライターを挟んで—英語と私」

第2章 フルブライターの体験的英語学習

2.1 地村 みゆき 愛知大学経営学部助教

「私のオススメ英語学習法」

2.2 山本 恵里子 元桜山女子学園大学文学部教授、元全米日系人博物館プロジェクト主任

「Where there is a will, there is a way: 英語習得と留学への道のり」

2.3 塚田 守 桜山女子学園大学国際コミュニケーション学部教授

「私の英語の学び方と留学体験」

3. 会務報告

総会

会則

役員名簿

第1章 フルブライターとしての「社会的発信」

フルブライトを挟んで—英語と私

近江 誠

南山短期大学名誉教授

1967年大学院留学

専攻：ドラマとスピーチ学

ポール州立大学、インデアナ大学

<7年帰国)

0.0 「英語をマスター」はありえない

「どのように英語をマスターしフルブライターになったか。そして、どのような留学体験をしたか」—。いくつか出された仮題のひとつに私はやや否定的に反応した。

まず「マスターなどということはありえない」。しかも留学試験までという時間決めまでついていては…。それどころか自分の場合はマスターしていないからこそ、フルブライトそのものを英語研究・訓練そのものとすべく、前人未到な分野に命を掛けて飛び込んだようなところもある。だから、マスターなどといってしまっては自分の留学の意味そのものの意味がなくなる。さらに帰国後どうなったのかの第3部がほしい。だいたいフルブライターたちは、ノーベル賞学者を複数輩出している、いわば第3部が充実している人材バンクで、会社を定年で辞め、十分やり遂げたと思っている人は誰ひとりいないはずである。

違和感のもう一つの原因は、この仮題の中に、英語に対する偏見をかすかに感じ取った（ようと思つたからである）。深遠なる研究のための<英語は所詮は手段である>という意識の表れだったとしたら手段としての英語だって切れ味は悪くなる。そして足を引っ張られる。

1.0 フルブライトまで

現代社会にはいろいろな“物語”や伝説が流れてきた。たとえば<英検は1級が最上で、TOEICは9百点、その上に国連英検がってフルブライト留学>などといフルブライトがあたかも英検の延長であるかのような伝説もそうである。しかも困ったことは、日本社会はいったんそれらに囚われてしまうと、専門家が何を言おうと聴く耳をもたないということである。

人生目標を「しあわせ」などを掲げている人間は、しあわせにはなれないという。人間は

弱きもの。目的を達成しようとして、一見関係のなさそうな多くの貴重な体験を削ぎ落そうとしてしまうからである。”Happiness is something that descends upon you.” Jordan Petersonはいっている。言語能力とて同じことである。実際、励んで、励んで、止めた時点で残っている解約価値（サレンダーヴァリュー）なのではと個人的には思う。

1.1 習い始めの中學／高校

錚々たるフルプライマーの中で、おそらく習い始めのころの英語力が私ほどダメだった人はいなかつたのではないだろうか。そのダメさ加減はほとんど学習障壁的であった。ただ、それは人と足並みを揃っていない部分のところに自分の無意識のこだわりが働いていたのではと多少自己弁護したい気持ちも伴ってなのだがー。

以下、30年前に書いた、英語を学び始めた当時のことをについて書いた私の記事を再録させていただきたい。私の原点なので異例に長くなるがお許し願いたい。

…ページ数も尽きてきた。

最後に一言付け加えさせていただきたいことがある。

それは、私自身、英語の勉強は早く始めたわけでもなければ、できが良かったわけでもないということである。

習い始めは、中学に入学した時点。出来はむしろ悪く、五段階評価の“2”がしばらく続いた。あまりできないので、おずおずと英語担当の先生に相談しにいった。

津田出身の先生はこういわれた。

「あなた“2”があった？」（当時リーダー都文法に分かれていた。）

最後列の窓際にかくれるように座っていたせいもあったろう。先生の記憶にすらあまりなかつたらしい。

なにせ S 大学の附属中学といえば粒がそろっていることで有名で、紛れ込んで入った形の私などは、ふさぎ込む一方だった。それに英語はだめだが数学はできるというのなら救いもあるのだが、天が見捨てたのか、これは英語に輪をかけたように悪かったのだから話にならない。美校（現東京芸大）出の父親の影響もあって自信のあった絵画も、俗にいう主要科目不振のもたらす精神的落ち込みのため、画才（？）も発揮できずじまいであった。さて、できないながらも、小川芳男先生の『英文法入門』などを買ってきて、コツコツ勉強はしていたので、三年になって多少成績は上がってきた。そんなある時、担任の先生が、「オイ、近江！今度のテストの成績好かったぞ」といってくれた。しかし、そのあとがよい。「平均点にはちょっとなかったけれどね」ー。

結局、友人の大半は目指す S 高校に入り、担任の忠告をがんとして聞かずに同校を受けた私は落ちた。発表の当日、すでに上気した顔で帰ってくる友達が私の方を見て何も言わないからおかしいなとは思っていたがー。

当時は、ここが駄目ならあと一か所、遠く離れた私立の男子校があるだけだった。ここでの試験は公立高校の発表のすぐ翌日だったが、前の晩から泣き通していたため目はすっかりはれあがり、蒲団から起き上がる気力もない。そんなところは受けたくない、浪人するとごねた記憶がある。両親も私の負けん気がよくわかっていたため辛かったと、今でも述懐している。情けなや、この時ばかりは父親に連れられて朝早く家を発ち電車に乗った。おそらくは外からは夢遊病者のように見えただろう。

港町の S で下車する。ここからまた、蒸気機関車に乗って遠くに行くのである。

受験校に着いたとき、受験生のひとりが「こんなところを落ちる奴はよほどの馬鹿だな」といっていたのが耳に入った。父の耳にも入っていたようで、「そういう落ちる人はいるのだろうからそんなことをいってはいけない」といおうと思ったらしいが、いわなかつた。父にもそんな気力すらなかつたらしい。

カレーライスを食べた。父はいまでもいう。「あの時食べたカレーライスは砂をかむような味がしたな」ー。

どうにか合格した。そしてどうにかここでは英語は一番になった。といっても試験の問題は、“summer, Tokyo”などが片側の語群にあって、“the hottest season of the year, the capital of Japan”などがもう片側にあってそれを結びつける程度のものである。実力試験も常にトップであった。といっても大したことではない。大学進学希望者（合格者ではない）が、我々の年度に十数名いたというだけで学校がびっくりしたほどだから、想像いただけるだろう。

野球とか柔道は強く、近隣の高校生など寄りつかなかつたが質実剛健の気風に男のロマンがあった。選抜高校野球で野球部が名門 S 高校とあたってしまい、これを一回戦で下した時は、中学時代の同級生が多くいるスタンドを見ながらザマーミロと思ったものだった。

とはいいうものの、学校全体の学業面における不振は救いがたく遅まきながら、エンジンのかかり始めた私や、肉屋の勇ちゃん辺りが先生に質問するのだが、答えらしい答えが得られることあまりにも少なかつた。英語が専門でない先生も教える。気の弱そうな地理の O 先生までが英語の時間に現れた時は、この先生までがと裏切られた思いがした。

「先生」といって質問しようとしたら「来た！」という顔でうつむいている。仕方ないので、そのまま質問し終える。ところが先生はまた下を向いたまま。生徒同士顔を見合わせて再び教壇を見たら、O 先生の姿がない。すると廊下の方を実스타コラ出していく先生の後姿があった。

これは終了の合図と考えて、悪戯鬼一同弁当を食べ始めた。ところが十分ほどたつたら先生は戻ってきて、何か板書し始めた。生徒の方は一瞥もせずに蚊の鳴くような声で「これ…（が答え）」と言ったかと思ったら、小走りに教室を出て行かれた。他の多くの先生がことごとくながづきしなかつたように、O 先生もこれつきり英語は教えることはなかつた。

英語ばかりではない。国語の A 先生は「分割」を「ぶんわり」、「幼稚」は「ようが」と読み（「優雅」の「雅」に似ているからか）、「上田敏」を「かみだとし」と読むことぐらい日

常茶飯事であったといつてもなかなか信じてもらえない。この先生の試験は教師用マニュアルの巻末についている問題集から出されていることがわかった。これが生徒用の虎の巻と練習問題と全く同じであったということを先生ご存じでなかった。ある時、「易」の音訓両方のよみの例をひとつずつ求める問題がでた。解答は少しだけ違えて置かなければと思い、「貿易易」(安易)とあるのを「易者」(難易)としておいたらなんとペケ。先生に掛け合ったが、「ダメ…」。

「罪を憎んで人を憎まず」と気取るわけではないが、私は母校を憎んでなどいない。むしろ非常に懐かしい。しかし教育に携わる人間として教育機関の抱える問題点そのものは許すことができない。また、卒業生として振り返る母校としても、母ではあるが哀れな母であったと認めないわけにはいかない。読者諸氏には分って頂きたいのだ。中学時代の悪夢からようやく醒め、ここで頑張ろうとした矢先、その夢が果たせぬ苦しみがいかなるものであるか——私はつくづく情けなくなり、校庭の裏にある東海の磯の白砂にうち出て波に向うるものである。

もうどうにもならないというので、昔の仲間のいる有名な英語塾に乗り込んでいった。夏や冬の休みには東京の祖父のところに留まって高田馬場の英語学校にも通った。

大学でたての新米先生に失望し、いわゆるベテラン教師にあこがれていた私は、ある日ラジオ講座の禿げ頭で怡幅のいい講師が去る公立高校の教師であることを知った。同じ高校の先生でなんでここまで差があるのだろうと思うと、その禿頭が非常に神々しいものに写り、涙がこぼれはどうにもならなかった。厳しくしごき、どんな質問にも答えてくれる先生に文字通り飢えていた当時の自分である。

大学に入ってからは、遅れを取り戻すことしか頭になかったのは当然である。幸いにも英語を学ぶのには条件がそろっている環境であった。以来二十年余、まぶたにうつりゆく恩師の横顔と共にあざやかに蘇えるのは、父と食べたあの日、あの時のカレーライスである。

(以下略)

(1988年拙著『頭と心と体を使う英語の学び方』研究社

「結びに換えて—波止場のカレーライス—」より)

1.2 学びのスタイルがつくられていった大学／幽学前

1959年に私は南山大学の英語学英文学科（現・外国語学部英米科）に入学したが、その頃には、もうかなりの学習の勢いがついてはいた。いわゆる一流大学というわけではなかったから、看板を背負ったまま成長が止まる心配はなかった。帰国子女が大勢いるから、すぐペラペラになるのではないかというようなミーハー学生も当時はいなかつたようで、程よいレベルの環境だった気がする。しかし日本で初めてのLL教室をもっていたし、外国人がいるからいいわけではないが、上智大との姉妹校で、ミッション系であったから外国人教師、母語話者はいた。そういう意味ではそのつもりになれば偏りのない学習献立をつくる諸条件は揃っていた。

ただし当時から日本の英語教育は、こうすることが英語の勉強であるという慣習ができてしまって、なぜそうするのかということを教えないくらいがある。これはそもそも教え方などという分野などは学問ではないという、厄介な偏見があったからということと、はっきりいうと英語教師、教育関係者自身、いや英語教育改革を訴えている大学教員ですら、実のところそれほど英語が得意ではないという厳然たる事実があり、これらのことことが足かせになっている。言い換えれば、いわゆる言語の修得のしかたについて実力に裏付けられた本当のアドバイスが出来る教師は大学にも非常にすくなかったということである。だから私の場合も最終的に学習の献立をつくっていくのは自分であると信じていた。

しかし、ということは「100人いれば百通りの方法があるのです」などと言うのはとんでもない間違いで、やはり理屈にあった方法で、しっかりした理論の裏付けがあるので、そもそもそれを開発しようとした私のフルブライト留学であった。

留学前の時期、私の英語学習の指針を与えてくれた人物の中でこの忘れることのできない2人の人物がいた。ひとりは、知る人ぞ知る、東大で二位が芥川龍之介で一位であったという伝説が流れている古武士のような風格のある名物教授野崎勝太郎と先生、もう一人は、歴史から学ぶことを忘れた日本ではもう知る人も少なくなったNHK 英会話の一時代を築いた松本亨の2人であった。

1.3 言語ラング観のベストの部分

野崎勝太郎教授の(as if=場合)によく)

殆どの人は文法、訳読=古い英語教育一役に立たないなどと想像するであろう。そういうパターン化された思考は眞実には永久に近づけない。この先生は訳読派に見える。が、狙っているところは日本語などではない。「as if=あたかも」などというと、「あた?あたとはなんだ」「かも?かもとはなんですか」立たせたまま徹底的に考えさせて日が暮れるという感じだった。

"He wept as if his own mother had died"は、if いかは仮定だからである「場合」を示唆している。そして as には…「のように」だから「彼は、自分自身の母親が亡くなった場合のようにしのび泣いた」と説明的な訳を求める。すべからくこの調子で、これで泣かされた数の学生は旧制八高時代から数知れず。

のちに述べる言語ラング派のベストな部分をきっちり抑えていている。この先生を離してはいけないと直感が働いた。そして実は野崎流の意味の把握は、のちの留学におけるドラマ学科での音声表現と劇的な一致を見ることがあるのである。私の代名詞のようになっているオーラル・インタープリテーション(音声解釈表現)において「場合のように」としみじ

み思われる音声を出すことが多々あるといつても、英会話ゴッコという閉じ込められた世界にいる学習者にはチンパンカンパンであろう。そこが問題なのである。

1.4 松本亨の英会話超えと言語パロール観の影響

NHK 英会話の松本亨は明治学院の教授であり、氏の著書『英語と私』(英友社)などの一連の書であった。

松本亨はもともとは教育心理学者であるが、広く知られている英語教育家として振り返ってみても決して単なる「英会話」の先生ではない。松本のNHK「英会話」テキストは、会話だけでなく、解説や、導入の英語の期日も何も、Follow me!"という感じで真似させ覚えさせる。ということは文字媒体の普通の文章であっても、大きな語り手がすみずみまでその時その場の意味をあてている「語り」(パロール)であるという私のその後の言語パロール観、(ソシュールですが結局届きえなかったパロール観)を植え付けてくれることになったのだから縁を感じる。

つまりリンゴは皮まで食べられるということがわかった。おかげで、私は大学の LL の教材で流してくれた FEN の聖書物語” The Greatest Stories Ever Told”や『アメリカ口語教本中、上級』など見出しから”食べて”しまうという、おそらく他の学生だったら、いわゆる会話の部分を練習させられた程度で終わっていたであろうところを、徹底インプットをするようになっていた。

同時に松本の、そうすれば自分のようになれるとだと静かに諭しているようなあのバリトーンはネイティブスピーカーの誰にいわれるよりも説得的であった。

以下の言語入力法は、用語ともあくまでも後年、近江がまとめたものであるが、もとはといえば松本に啓発されて執拗に実行していた練習である。

1.4.1 入力法 1 聞き流し法

俗に言うシャワーのように英語を聞き、それらが意識、無意識に無意識的に取り込まれていくのを期待する方法である。言ってみれば母国語習得の過程で誰もが無意識的におこなってきた方法で、潜伏期間を経てやがて発話に至る言語入力である。但しこのいわば自然獲得法だけでは不十分なのは野菜だけ食べても人体が持たないのと同じで、そういう入力法もそれなりの意味はあるということである。

私はラジオやテレビでそれこそ浴びるように英語を聞いた。何を聞くかだが、あまり選択的にならなかった。国内では FEN と英語ニュースと短波放送、洋画とか選択できる

ほどの種類の英語が当時は流れているわけでもなかった。(もちろん後でも述べるが、この入力は留学期間中にその分量ははかりしれなく増大したのはいうまでもない。)

1.4.2 入力法2 口真似法

聞きながら、あるいは読みながら、自分がこのように言えるかという立場で心に留まった箇所を声に出してみるという入力法である。入力法Iの聞き流しの間に、ある部分を捉えてこの2に切り替えて真似してみる。表現ノートなるものをつくって、前後と共に書き留めておいた。こうすることによって、時々ノートを見返しながら一人練習する。これも今に続く殆ど生活習慣化している訓練である。表現ノートの数は100冊ぐらいある。

1.4.3 入力法3 多読法

読んで、読んで読みまくることを通して、様々な言い回しが無意識的に吸収されるという入力方法である。入力法Iの読書版といつていい。

私の場合は大学時代、学校のテキスト以外に哲学、文学から三文小説までむさぼり読んだ英語の本の数は100冊ほどか。そのうちに話す英語への転移が明らかに行われ、連続的に話すことが、他の入力法とも相まってできるようになっていった。

私はこの手の多読に入る際には、必ず鉛筆を用意しておいて、表現的に意識に止まった箇所に軽くマークしておいて、後でそこに戻って音読に切り替えて表現の更なる取り込みをする。そして、その流れで次は、それを応用している場面を適当に思い浮かべ喋っている場面をシミュレートしたりした。

1.4.4 入力法4 音読法:

後にフルブライトを通してアメリカの大学のドラマ・スピーチ学科でオーラル・インター・プリテーションを学びつつ学習効果を強化させるモード転換訓練などを付け加えて自分が発展させていくなどとは想像もしていなかった方法。当時は非常に素朴なもので文章を繰り返し内容と目的を味わいながら音読して覚えていくというだけで、松本もひたすら後に付けていわせる程度であったが、これなくしては言語をすることはありえないというほどの実感があった。

1.4.5 「英語の独りごと」練習

松本の『英語の学び方』の中にある。上のような手段を通して入力してきた英語の蓄積を

錆びつかせないための、いわゆる発信する自己訓練である。時と場所を選ばずに自由に、心に浮かぶよしなしごとをそこはかとなく語っていく。

これが募っていくと、「英語で考えること」「日本語を介さずに英語で直接に言いおこす、書き起こすこと」がこれなのではないかということが実感できる。

別に気張ったことでもないのだが、したことのない人々は「英語で考える」などという用語のところだけに注意が行き、そんなことは日本人にはできないとか、血圧があがり思考停止したり炎上したりする。日本社会の病理は当時からあり、ある時、温厚な松本氏も「騒ぐことはない。私は英語で考えている」といっていたのを覚えている。

母語話者の様に出来ることは誰もいってはいない。今の私は、「しょせんは縁亡き衆生は、<こんにちは、便所はどこだ、さようなら>と会話ごっこをやっていればいいと切り捨てるところだが、当時は自分のことで必死であった。

さて、この独り言練習が、ドラマとスピーチ学の方法を取り込んで、計り知れなく豊かな練習になり、のちの近江の**体内の英語サブチャンネル**になっていくとは当時はわからなかつた。それはさながらプライベート・ビーチで水遊びしていた幼児が、その水が世界の海に、さらに深海につながっているという実感は持てないであろう状態に似ている。ともかくも入力活動を一方で続けて行けば喋る練習は自分で相当できるし、確実に口をついで出てくるようになるという実感は十分に持てた。

1.0 留学体験

2.1 フルブライト論文審査と口頭試験

審査席の中央にドラマと英語教育の米国の演出家リーチャード・ヴァイア氏がデンと座り、瞬きもせずに入室からじっと私を見ていた。私が着席して開口してすぐに氏の言った言葉は、“I was very impressed with your paper…”であった。

論文の最も強調したかった点は、<一片の「書かれた」文章が実はドラマのセリフの様に語り（パロール）であり、その意味で自分の体の中でのパラダイム転換は確実に進行していたように思える。あとはその感覚を磨き実際にそのように料理できるうでを身につけるためにはこの分野で学ぶことは絶対に必要なのである）であった。

2.2 留学体験 英語教育のためのドラマ・スピーチ学科の学部レベルの先づけ臨床体験！

フルブライトに提出してある<英語教育におけるスピーチ・ドラマ学の理論と方法>が、理論倒れにならないためには、どうしても原体験を私自身がしておく必要があった。それも院の理論科目のあとで申し訳程度に履修する程度のものでは、“料理”の学位は取得したが、“料理はできない料理人に間違いなくなってしまう。それを防ぐためには、学部レベルの実践科目 (hand-on experiences) である演技 (Acting)、ディレクティング、音声解釈表現 (Oral Interpretation=以下O I)、スピーチ、発声等を履修したい、しなくてはならないのですと言ったら、指導教授 Edward Strother 氏も柔軟な思考の持ち主で、それらのすべての学部の科目を、院の Seminar と Independent Studies の特定 2 科目として読み替えるという名案をだしてくれた。かくして私は、後付ならぬ先付けとしてのドラマ・スピーチを目いっぱい学ぶことができたのである。

さらに、その年度の終わり修士号取得単位はほとんどを満たしていた段階で、フルブライト委員会に許可をとり、インデアナ大学に学びの場を移し、そこでも同じ受講パターンをとって徹底を図ることにした。実践科目の体験こそ帰国後ではどうにもならない宝になる。私の思いはなかば執念化していた。

2.3 留学体験 オーラル・インタープリテーション（＝音声解釈表現）との出会い 先のアクティング（演技）と連動させて…

Oral Interpretation is the art of communicating to an audience a work of literary art in its intellectual, emotional and aesthetic entirety ———Charlotte Lee—

今から振り返ればあくまでも表面的ではあったが、2年目インデアナ大学でも同名科目を履修したあたりにはO I の面白さがわかってきていた。詩、散文、戯曲等あらゆる種類の文章を最終的には朗読表現に移すという原体験をたっぷり積むことになった。

この定義からも自明だが、パフォーマンスはあくまでも表層である。実際は定義の interpretation の言葉が示すように「解釈」である。

帰国後、学生との様々な作品を通しての格闘を経るにつれ、私のこの思いは phobia になっていき、現在各地でO I を英語教師に、O I は頭と心と体をつかった読みの深めの手段であり、そういう深い読みがあるからこそO I が英語の総合力をつけることにつながっていくのだということを伝えきれない空しさを味わうことになる。いずれにせよこの解釈面を

表に出すことによって、帰国後の<英語教育におけるスピーチ・ドラマ学の理論と方法>（近江メソッド）に関するすべての活動が本格化する。

2.4 留学体験 スピーチ系列とドラマ系列が<渾然たる一体>となる最大の魚場をつくる

アリストテレスのレトリック三部作（Rhetoric）から連綿と続くレトリック研究の流れがある。学部のパブリック・スピーキングや院の上級スピーチもその流れで、私は語り手の目的とそれを達成するための話の組み立てを実際を通して学んだ。我が国では「修辞」などと言う不幸な訳語の為に言語教育の中にレトリックという概念が育たず、いわゆる狭義の演説のことしか想像されないが、ここでは狭義のスピーチ（演説）ばかりではなく、すべての形式のコミュニケーション目的を達成するための原点的なものである

2.5 留学体験（学外） 百科事典のセールスの訓練

1年目と2年目の間の1968年の夏ロサンゼルスでのこと。フルブライト委員会の許可をとって悪名高き百科事典のセールス訓練を受けた。これはスピーチ・ドラマの観点から学べることが多々あるはずだという思いからである。

「とにかく丸ごと営業用のセリフを身体に叩き込む。教官の思うようにならないとバンッ！と机を叩かれる。一日ごとに覚えるセリフの分量が増え、一週間もすると今度は口うつしで叩き込まれる。こうなると丸暗記では無理。私の場合は話の展開を理解していることが身体に入れるのを助けるということがここでもわかった。そうやって訓練されたセールスマンたちが車に分乗され南カリフォルニアの街々をまわっていった…。」

（週刊文春「カリスマ英語教師の丸秘テキスト公開—スピーチで学ぶ近江メソッド」平成15年12月18日号より）

軍隊式訓練の体験で度胸がついた。しかし、理解を伴わせ、その積りになれば相当量の英文も短期間で覚えることはできるという体験は、大学でのスピーチや演技科目における訓練からのものである。

2.6 留学体験（学外） 同病異治

私の留学プロジェクトは、自分自身を脇においてデーター収集すればできるものではなかった。まずは自分の英語に進歩がみられなければ、それだけでも無意味であっただろう。もちろんそれが留学中に達成できるものでしらない。

早く上げてしまおうという当世流の価値観を唾棄していたので、私は褒められることにあまり心地よさを感じなかつた。非母語話者であるからということで大目に見られているのではないかという疑いの気持ちがどこかにあったのかもしれない。冒頭の長いエピソードの中の自分はそのままであつた。

ある時からO Iの担当教授に頼み込んで個人的に指導してもらったことがあるが、案の定自分のスピーチの欠陥がボロボロと見つかった時などは、「そらやっぽりあったではないか」と落ち込むどころか心は赤飯ものであった。

2.7 留学体験 異病同治を基本に同病異治も排除しなかつた。

また、もう一点、近江メソッドの基本は漢方の異病同治で、スピーチ矯正も私のシステムの中ではコンテクストの中で行うもので、そうすることで読み、表現すべてを同時に攻略できるというのが基本であった。しかし同時に目的を達成するために、いいと思われるものがあれば、コンテクストレスのアプローチではあったが排除しなかつた。白衣の医師に発音強勢を学内のスピーチクリニックに出かけて行ったこともある。同病異治である。

2.8 留学体験 ふたつのリスニング

2.8.1 テレビ・ラジオからの無差別的多聴表現の書き取り、摸倣練習

入力法1, 2の混合スタイルの聴解で、聞く対象に対してあまり選択的にならず片っ端から聞くことは、放課、授業間などでよく行った。当然のことながら、現時点でも行っている。というより言葉に習熟しようとしている者がこの入力を取りやめる理由はない。留学中は、学生寮のラウンジに置いてあつたテレビもよく聴き、書き取り、暇な灘に口慣らしをしていた。放送終了であることも気づかずにソファに眠っていたことも何度かある。時々あるので寮生たちは知っていたようである。要は、それほど英語を盗み取ることは渡米前からの私の英語訓練で欠かせない訓練になっていた。

2.8.2 批評鑑賞法的聴解 (Critical and Appreciative Listening, Rhetorical Listening)

日本の英語教育界では全く真空地帯であり、しかしそれが故にいわゆる日本人の英語音声表現の質の壊滅的な弱点になっている訓練。授業科目として開講されていたわけではな

い。しかし、この分野に身を置く者は、それなりに行っていることが多い聽解である。それは**演劇、スピーチ、音楽、その他あらゆる表現芸術**を目の前にしたときに**共通する（理想的な）評論家、批評家の聽解**である。芸をレトリック的な視座で鑑賞しつつ分析的にみる。外国人である私にとっては、優れた話芸面劇、スピーチの録音を、リスニングライブラリーなどであさり、その芸を盗みとることは必須であった。もちろん生きた素材があればそれも範疇に入る。たとえばインデアナ大学の指導教授カルバートソン教授のような素材だ。

舞台（いたふみ）の本格的訓練を通ってきたスピーチ教授とパブリックスピーキング系の英語の歴然たる違いに触れる

カルバートソン教授からは、学部では Speech for the Stage 実践科目を、院では Speech Pathology の講義を受けたが、その内容もさることながら、何と言ってもこの**稀代の名スピーカー**が語る英語そのものが一片の芝居を見るがごとくの見事で、これは私にとって何事にも代えがたい貴重な体験であった。スピーチ・ドラマの学生が手本とするほどであった。

ある芸に上達したければ一流の物に触ることは必須であるが、私がそういう目で聽講していることを流石にこの教授はある程度わかっていたようでもある。

また、カルバートソン教授は、いわゆるパブリック・スピーキング畠の英語スピーチそのものに懐疑的であり、そう公言するのを憚らなかったが、その英語の見事さを、身を持って証明してくれた。この有無を言わざずの本物の力は強く、これでその後の教師としてのカリキュラム、シラバス編成における優先順位を決める際の実際の感覚を構成にも役に立つことになったのは当然である。

2.9.1 留学体験 大学院2年目での”Directing“ と”Styles of Acting“

2.9.1.1 Directing

各自で作品と役者を選び、互いにスケジュール調整をし、監督となって指導し教室で発表、教授も含めてコメントし合う授業であった。私はこの時期あたりから、自信もつき、ネイティブ学生相手にでも、場合によっては実際に範を示しながら教えるところまで出来るようになっていた。

その後、日本に戻ってから授業はもちろんのこと、南山短大生を連れて行って文学作品音声表現フェスティバルなどで都内の四大の学生などを相手に年々優勝、入賞させたり、その他、種々スピーチコンテストへの参加学生の指導、そして南山の名物行事の英語オーラル・インタープリテーション・フェスティバルなど長年にわたって企画、指導、演出な

どの指導にも自信を持って望めるようになっていた。テープを聴いて機械的に真似る、中高の暗唱コンテストの指導の様子を横目でみながら心を痛めている。

課題として選んだ芝居は男2人、女1人を使った “The Terrible Meek”という、まったく大した劇ではなかった一幕物であったが、いい出来だったと複雑な評価をされた。まったくさえなかった男性が、深い演技をしてそれもほめられた。教授は「こんなすごい役者がいたのか」と呟いていたが、「それは私が苦心してあそこまで持ってきたのです」といいたかった。

Directing という授業のなかでのことであったとはいえ、すべては密室の特訓で指導者は顧みられにくい部分である。この手のことは役者の手柄か失敗になってしまう。後年、わたしは各地の講習会の類では、指導しているところを見てもらうことで学んでもらうという形を好むようになったのは、そういう形を取らないと、わかつていないのにわかっていると思っている者には絶対にわかつてもらえないであろうと思ったからである。

2.9.1.2 Styles of Acting

ギリシャ劇、中世宗教劇、シェイクスピア、近代劇、外国劇、現代劇など、異なる時代の色々なスタイルの芝居を演じ批評し合うクラスであった。

チェコフの『桜の園』（The Cherry Orchard）の、農奴のヤーモライのモノlogueが主になっている箇所をやったときのことである。私の長ゼリフに反応してくれる女主人ラネーフスカ夫人の存在がほしかった。そこでドラマ学科のマドンナのキャシーに声を掛けた。

屋敷の競売の結果が気になる。“is the Cherry orchard sold?”というキャシーに対して”私が sold“と答える。“Who has bought it?”と彼女。“I have bought it….”と私。反射的に、彼女が顔を背けて忍び泣きはじめる。ところがリハーサル期間に、ある時点から、むしろすがるような泣き方にキャシーは微妙に変えてきた。これはその箇所だけの動きの問題ではない。この体の捻りひとつで、前の世界は神隠しにでもあったように消え、二人の人間関係までががらりとかわったようになる。

身体的な動きは、文字テクストとそれと連動する。だが一致するとは限らない。通常サブ・テクスト (=せりふした) が示すホンネの世界の方と一致することを感じると貴重な読みの体験もしていることを再確認した。

併しそれだけではない。『桜の園』の発表は、これを見て感動を覚えてくれた。まず唯一の外国人学生で孤立感があったであろう私と、教授達も含めた男性たちの高嶺のユリのようなキャシーの二人が前に出て行った時に場に流れた沈黙である。

主従の関係の物語に、表に出たキャシーの角度は利害関係の対立する女主人のものではなかったかもしれない。しかしその頃には芽生えていた相寄る気持ちが微妙に流れこんできたのを、キャシーも私も修正もしなかった。この微妙な雰囲気が隠し味となって、一片の心のドラマになっていればそれはありではないかー。

感動とは原作への忠実性とか史実に忠実かどうかではない。真実の心がかよっているかどうかなのではないのだろうか。この時あらためて実感した。

2.10 留学総括

開学以来の秀才と言われた女子高校生の訪問を受けたことがある。

「東大かハーバードで迷っています」。高校の先生はなぜか真面目に取りあってくれない。実はノーベル物理学賞の小柴昌俊先生に相談した。「あなたは早々と進路を決めてしまうには惜しい才能をもっています。ハーバードがいいのでは」といわれた。近江先生はどう思われるかということであった。私の答えもハーバードだった。(ちなみに小柴氏は68年度フルブライター)

結局、進路を早々と決めさせたり、学問や教育に対して時間決めて結果を求めようとするのはおかしいのではないか。小保方いびりにもそのあらわれ。**不肖私も留学の全期間は、後日開花させる食材と基本技術をたっぷり吸収させてもらった、いわば準備期間だった。**

かくして今、瞼を閉じればチェコフの長セリフを、私のすがるように泣いたドラマ学科の花形キャシーの息遣いと共に蘇えるセリフも、あの時の官能も、カルバートソン教授の音吐朗々、絵巻物のように美しい英語も、早朝のスピーチのクラスも、すべて2-2のオーラル・インターパリテーションという大河への理解を同病異治的に深めていった。と同時に逆にそれぞれ異なる病気と思って別個の科目をたてたりしてあたふたとしている日本の愚かなる教育界に、読みを深める訓練も、ひいては人の心をつかめる訓練も、分析的に物を見る目も、雄弁のカラクリを自らのものとして吸収することも、すべてに繋がる異病同治ということを痛感すること、すべては縦割りでなく有機的な横つながりで、言語修得という視点で自分の体の中で近江メソッドの礎がつくられていったと思っている。

3.0 留学後

充実した、しかし「準備期間」としての留学であった。もともと留学というものは一話完

結の観光旅行でも目的ではない。この原稿を書く上で「留学後」がなくては終了しないと構成にこだわったのもそういうわけであった。人生を一片の長ゼリフ、あるいはスピーチと捉えた感覚である。

さて、私のテーマである「ドラマとスピーチ学の方法を使っての外国語のとしての英語習得一言語パロール観へのパラダイム転換」の体系づくりは、大学の授業、課外、学会活動の中でフィードバックを受けながらかためてきた。

そしてその都度、以下のような著書を世に問うてきた。

- ・『オーラル・インタープリテーション入門英語の深い読みと表現の指導』、1984年大修館書店
- ・『頭と心と体を使う英語の学び方』1988年、研究社出版
- ・『英語コミュニケーションの理論と実際ースピーチ学からの提言』、1996年、研究社出版、1997年度大学英語教育学会[JACET]実践賞
- ・『感動する英語！』2003年文藝春秋
- ・『挑戦する英語！』2005年、文藝春秋
- ・『間違いだらけの英語学習—常識38のウソとマコト』、2005年、小学館
- ・『アナログ教育の復権！あることば訓練の舞台裏 思い出の朗読会』2019年 朝日出版社 その他

同時に、各地講演、ワークショップも行ってきた。そして2011年の退職後も引き続き近江アカデミーで主として現職の英語教員、教員志望者、一般、学生などに訓練を行っている。指導者の質の向上がなければ、言語教育の質は絶対にあがることはないと確信している。

3.1 “無知の壁”との格闘

しかしながら、留学体験後の時期は、順風満帆からは程遠い。それはむしろ**カオスの中で試行錯誤しながら弁証法的に深めていく期間**とでもいうべきものかもしれない。なぜなら私の場合はシステム開発とともに、教育人間としてそれを浸透させていくという課題を自らに課しているからである。予想されたことではあったが、近代の呪縛でありパロールのソシュールですら乗り越えることができなかつた言語ラング観偏重の壁—あるいは壁という意識をまったくもたない多くの言語教育関係者、メディアや社会の壁はこのほか厚

い。

マークトウェインは言っている。

「災いを引き越すのは“知らないこと”ではない。“知らないのだということ”と思い込んでいること”である」と一

3.1.1 壁エピソード 勤務校での<表現系列／文化理解系列／国際理解系列>という捉え方

最盛期の南山短期大学の英語科は四年生の英語を凌ぐと言われ独自の存在であった。しかしながら長い期間、宿命的な学科編成の壁があった。というのは、ある時期から<表現系列／文化理解系列／国際理解系列、3系列に強引に分けられてしまった。そしてなんと、ドラマ、スピーチ、オーラル・インターパリテーション、ディベートなど、私が読み替えをしてまで履修した訓練をそれぞれ独立した、しかも表現科目と、とんでもない思い違いをしてしまった。ラング偏重の思考が制度化された例である。

ここでの訓練は「表現」ではない。表現していると思っている文字テキストは、そのように書き手が話している、そのように書き手が身体を動かしているということで、それを読み取ることは、とてつもない受信訓練をして言えるのだ。オーラル・インターパリテーションはコミュニケーション精読なのである。

これが感覚的に理解できなければ、現在、コミュニケーション重視の英語教育活動はほとんど意味がなくなる。

パフォーマンスはあくまでも表層である。実際は定義の interpretation の言葉がしめすように「解釈」である。それも精読である。それも平面的なものではない。まず部分だと全体だと、それ単独の意味の追求が主ではない。大切なことは、①誰が、②誰に向かって、③いつ、④どういう場所で、⑤どういうコミュニケーション目的を達成するために、⑥単独ではどういう意味を持つその部分、あるいは全体(内容)を、⑦どういう論理的、感化的、空間的な組み立ての中に置くことで、どういう意味と機能が付与されているのかという観点で素材を見る。朗読者がある箇所をあるように表現したら、その賀音声と体の形は、彼がその箇所に対する意味を自分はこう捉えたという解釈と等価のものであると考えるのである。

ここに意味とは言葉の中に<決定済み>のものとして内在していると捉える<言語ラング観>がある。多くの言語学は基本的にこれに依っている。これに対して、ドラマ・スピー

チ学では意味は、語り手によって付加されるものであるという<言語パロール観>の立場にたっている。

しかもそれだけではない。スピーチ系のテキスト分析、同じくドラマ系における原点的なスタニフランキーからの知見をも取り込んだ立体的、かつ深いところに届く、盤石の解釈体系の組み立てを確立、追及することになる。決して、ジェスチャーがどうのなどという表面的な問題ではない。もっと深い。

1. 「それを言っている時に、あなたの体は何をしているのか？」
2. 「それを言っている時に、あなたは心の中でなにを思っているのか？」

なぜ深い理解にそれほどこだわるのか。それは、繰り返しになるが深くテキストを理解してこそ、近年理解と絶縁した口先だけの音読や、シャドウイングと違い、質の良い、応用力の効く言語・非言語の入力が可能になるからである。

3.1.2 壁エピソード 招かれていった高校での講演中、「英検の講習があるので一部の生徒が退出します」

私の話は、異病同治。読みの力も、話す力も、聞く力も、話す力もすべてに通ずる勉強の話である。そしてそのことを主宰者は分かっていると思ったのが大きな間違いであった。担当教員が開始前に私に上のようなことを耳打ちしたのである。しかしこれはこの高校だけの話ではない。北海道から沖縄まで基本的にかわらないことを、各地を回ってきた私の溜息である。

3.2 現在の自分の英語力と指導者としての関係

表題の自身の英語力に関しては留学試験合格時点より進化していかなければ、自身の変化をモニターしているところがあるから、自分のしてきたことはすべては胡散霧消してしまう。そしてそれは不誠実なことである。

そこで現在の自分はどのあたりにいるのか。これに対しては巷の検定試験のあれやこれやがもはや存在しない次元で彷徨っているであろうが、それは決して高いレベルであろう、むつかしいのであろうというのも違うといいたい。求めてきたものは質と深さであり試験などでは計れない。そして同じ追及をする姿勢の大切さを訴えてもきた。私のかかわっている生徒の中には、上は大学教授から下は中学生までいる。学習者のレベルで差別はしない。まがい物でない、体にいいものに大人も子供もないからである。

3.2.1 近江メソッドの普及と日本人力／真正コミュニケーション力を涵養に一列島英語難民状況に対応して

近年、予期していなかった状況が生まれてきている。それはもはや英語が話せる、話せないなどという問題だけではない。英語を勉強すればするほどに、日本人そのものが内部崩壊してきていて、しかも多くの人はそれに気がついていない。私はこれを列島英語難民現象と呼んでいる。

原因は一言でいえば、日本人が英語という言語と“不適切な関係”を永年結んできたために、刻し刻し合う仲になり、単に「話せない」ばかりか、数々の“言霊の祟り”を受けてしまっているからではないかとみている。

人間関係と同じである。「君はしょせん（金儲けのための）道具だ」と道具扱いされたらその人の為に役に立ってやろうとは決して思わない。言語とて同じだ。

祟りとは、すなわち慢性化した英語ペタ（頭打ちのまま）による苛立ちとルサンチマン、人格変容／性格破綻／文化的不感症、等々。知的、情緒的、審美的劣化等々。

フルブライターとて対岸の火災視はできない。「英語よ君は僕の召使だ。試験までに君を自分のものにした。あとは私の深遠なる学問の手伝いをしてくれればいい」では、どこかで貴重な命を賭けてきた仕事が間違って伝わってしまうなど、それなりのしっぺ返しを受けかねない。

ことばは神である（The Word was God 旧約聖書）。知の巨人 Jordan Peterson も時に叫ぶように、時に泣くように訴えている。Speech is…は“Divine”という言葉を彼はいっていた。もちろん Speech といつても言語ばかりではない。非言語まで含んでいるし文書化されたものも入っているはずである。そしてその能力を極限まで高めようと努力することとを人類の平和にまで重ねようとするなりうる。一方それを怠ろうとすることは、人間としての義務(ethical duty)を放棄することであるという趣旨のことを繰り返し言っている。我が国ではどうか。英語は海外旅行、英語産業の金儲けの道具、金儲けの道具、道具である。

ドラマ・スピーチ学を母とする研究領域が益々広がり、地球全体を視野に入れたコミュニケーションへの関心が益々広がってきた。帰国後の私が、日本コミュニケーション学会の会長に就任していた時期があったのも、フルブライターの社会的責務の一部を果たすことには繋がるとの思いがますます強くなっている。

具体的には近代が切り離した人間と言葉をつないでいく近江メソッド（名称はいいが）でことばを極めようとする過程が、実は英語を含みつつそれを出て日本人力と真正コミュニ

ケーション力というものを養成していくことにもつながり、グローバル社会に各自が貢献できる道につながっていくと信じている。

第2章 フルブライターの体験的英語学習

2.1 私のオススメ英語学習法

地村みゆき

愛知大学経営学部助教

(フルブライト博士論文研究プログラム：ミシガン州立大学 2011～2012)

大学英語教育に携わるようになって4年になるが、学生からよく求められる助言の一つに、英語学習法がある。一番多い質問は「どうやったら英語が聞き取れるようになりますか」である。今や日本でもあちこちで様々な言語が飛び交っているように思うが、意思疎通のために使う言語はやはり日本語になる。コミュニケーション手段として英語を必ず使わねばならないという環境ではないため、英語を聞く力を伸ばすのはそう簡単なことではない。

テレビやインターネットでよくみられる英語学習教材の宣伝の影響からか、通学中にひたすら日常英語表現フレーズを聞いて耳を慣らせば良いですかという学生もいる。高校生の時に一度、私もそのような教材を手に入れたことがあるが、長続きしなかった。私個人としては、英語のシャワーは良いことかもしれないが、耳に入れるフレーズにそもそも興味がなければ身につかないのではと思ったりする。手っ取り早いのは英語圏で生活することだ。しかし、助言を求める学生の大半は、英語圏に語学研修に行く前にできるだけ英語力を向上させたいと思っているか、就活を目前にして、TOEICの点数アップに必死になっているかのどちらかで、「英語圏に長期的に留学し、生活する」のは無理な話なのである。

そこで、学生の質問への答えの一つとして私がいつも用意するのは、映画や海外ドラマを利用した英語学習法である。映画や海外ドラマは、話されている言語だけでなく、海外の文化や歴史の一側面を私たちに教えてくれる。もともと英語に苦手意識を感じていた私が楽しく英語学習できるようになったのも、映画や海外ドラマの影響によるものが大きい。(10代の頃にNHK教育テレビの夕方の時間帯に放送されていた「フルハウス」、「アルフ」、水野晴郎さんの「金曜ロードショー」や、淀川長治さんの「日曜洋画劇場」が懐かしい。) 現在、自分が担当する一部の授業でも、映像教材を採用し、学生が自律的学習者として課外でも英語に親しめるように、教材としての映画や海外ドラマの活用法を紹介し、オススメしている。周知のものばかりかもしれないが、今回のエッセイでは、私の英語の授業における映像活用例を含め、その学習法を紹介したい。最初に断っておくが、私の専門は英語教育学ではない。今回私がオススメする方法は、自分が英語学習者として培ってきた経験に基づくものであり、学問的見地からアプローチしたものではない。その点につ

いてはご了承いただきたい。

<準備するもの>

用意してほしいのは、まずは、ブルーレイディスクかDVD、あるいは日本語字幕、英語字幕、日本語吹替などがフル装備されたVOD（私は契約していないが、Netflixでは字幕の切り替えができるらしい）の形態の、映画か海外ドラマである。個人的には、アクション映画やSFよりは、ヒューマン・ドラマやコメディの映画や海外ドラマの方が、日常会話で盗めそうな表現が多く学べるので良いのではと思う。不純な動機かもしれないが、キャスト陣に好みの俳優がいるので選ぶ、というものでも良い。ディズニーが好きな人は、ディズニー映画から入るのも良いかもしれない。ディズニー映画は言語や文化、民族的な観点から色んな面で配慮がされているし、比較的容易な英語で会話してくれるケースが多いので、オススメである。

<映画・海外ドラマをどう使うのか>

① 映画・ドラマの内容把握と聞き取り、書き取り

まずは英語音声・日本語字幕でひと通り、映画・海外ドラマを視聴してほしい。それで、だいたいの内容を把握したら、今度は英語音声・字幕なしで、場面ごとに切りながら映像を見る。さて、どこまで聞き取れるだろうか。音声を聞きながら、何が話されているのか考えよう。何度か同じシーンを字幕なしで視聴した後、英語字幕にして、同じシーンを視聴しなおすと良い。自分が聞いた（と思っていた）語（句）と違う語（句）が実は話されていた等、面白い発見があるかもしれない。

そうした活動をする際に、映画や海外ドラマのスクリプトが手元にあると良い。今は電子ブックや本で「(映画・海外ドラマの名前)で学習する英語」などの問題集や教科書がたくさん出ているので、それを入手して自分でやってみるとやりやすいのではないかと思う。

私が担当する授業では、毎回の授業ごとに映像を区切って、約10分のシーンを学生とともに視聴していく方式をとっている。まずは、視聴する映像に出てくる重要語句と、身に付けてほしい英語表現の意味を確認した後に英語音声・日本語字幕で映像を見せる。その後、内容把握の質問をする。内容を把握しているか確認した後、その映像の中から英語学習に最適なシーンを数分間分切り取り、そのシーンのスクリプトの語句をところどころ空欄にしたものを作成する。そして、次は英語音声・字幕なしの映像を流し、今度は学生とともに単語の書き取りをする。一人でやると悩むだけで何も涌いてこないので、基本はペアで行うこととし、何度か映像の音声を区切りながら繰り返し聞かせて、ペアで空欄に入る単語を推測してもらう。単語の頭文字を書いて、そこから単語を想像してもらうこともしてみる。映画やドラマの音声だけではなかなか聞き取れない学生もいる。そのため、そのシーンを他のネイティブ・スピーカーが演じている教材用の音声を再生し、も

う一度書いた単語と照らし合わせて確認してもらった後で、答え合わせをすることにしている。今は、映画や海外ドラマを素材にした教科書を活用して授業を運営している。書店などで気軽に買える参考書だけでなく、最近は松柏社、金星堂、成美堂や英宝社などの教科書の出版社からも映画・海外ドラマ教材が出ているので活用してほしい。

② 映画・ドラマで使われた表現を学習する

映像の音声を聞き取れるようになったからと言って、英語が話せるわけでも、聞き取りがすぐに上達するわけでもない。私は、リスニング・ヒアリング能力を向上させるには、自分の声で発音・音読するのが重要だと考えている。したがって、私は単語の書き取りの後に、切り取ったシーンで話されている表現と意味を解説した上で、そのシーンのスクリプトを使い、授業では音読練習をすることにしている。まずは教員である私がスクリプトを文ごと、チャンクごとに区切り、音読し、学生にリピートしてもらう。そのあと、学生はペアでそれぞれの登場人物になりきって音読の練習をする。終わったら今度は役交代して、音読練習を続ける。そのあと、CD音声でシャドーイングをし、時間に余裕があるようなら、実際の映像を英語字幕で視聴しながら、それぞれの登場人物になりきってシャドーイングをする。このようなシャドーイングには口慣らしだけの効果しかないと言ってしまえばそうかもしれない。しかし、日常で話される英語のリズムや速度に慣れるためには、こうした活動は必要であると私は考えている。ある程度の英語力を持つ学生は、実際の映像と音声に合わせた英語字幕のシャドーイングおよびロールプレイを、非常に楽しみしてくれる印象がある。

自宅でやる際は、映画や海外ドラマのスクリプトを使って自分で音読してみると良い。発音が分からぬところは、英語音声・英語字幕で映像を視聴しながら聞き取る努力をしよう。できれば、それまでに視聴した場面の状況を想像しながら演じてみると良い。

③ 映画・ドラマで使われた表現を定着させるために

ただスクリプトを音読して、英語の羅列を音にしているだけでは表現は定着しないよう思う。したがって、私は映画・海外ドラマのスクリプトを活用し、切り取ったシーンのスクリプトの中で学生に特に覚えてほしい表現だけを日本語にした補助教材を作成している。配役ごとに、それぞれ3、4つの表現をピックアップし、日本語にする。学生はペアで練習しながら、日本語を目で追いながら、その意味の英語表現を想像しながら文を組み立てる。ギブアップの場合は、ペアの相手の学生が、日本語か英語で極力その表現を使わずに、ほかの言い方で答えを教えるという形式で進めていく。そして、何度も役割を交代して、答えになる英語表現を定着させていく。

これを丸暗記の学習法だと批判する人もいるかもしれないが、私はこの重要表現を何度もペアで、意味を想像しながら暗唱し、覚えていくというプロセスは大切だと思っている。母語であれ第二言語であれ、私たちはみな、人の真似をしてリピートしたりして、状

況に応じた言語表現を身に付けてきたのだ。話さなければならないシチュエーションで、知らない英語表現がふと、何もない中から湧き出すわけがない。

私の授業では、この活動を行うときにいつも、学生は急に活き活きとし始める。一方的に音声を流し聞き取り活動をしてそれで終わりではなく、ペアで自らの口で学んだ表現を発音し、役割を演じ会話することで、学生同士が互いに刺激しあい、英語を楽しく学習できているのではないかと思う。

そうして覚えた表現は、2週に一回小テストをして学生の理解度、表現の定着度を確認している。単語テストをするよりも、より実用的で良い気がしている。

④ 映画・海外ドラマ活用応用編

映画・海外ドラマ好きの人は、同じ映画やドラマを何度も見たことがあるかもしれない。私も気に入った映画やドラマに出会ったら、つい何度も視聴する癖がある。2018年に上映されたクイーンのフレディ・マーキュリーの半生を描いた『ボヘミアン・ラプソディー (Bohemian Rhapsody)』なんて、もう5回以上見ている。こうした癖を、少しでも英語学習にも結び付けようと思い、私が実施している視聴法をここに紹介したい。

視聴1回目は、英語音声・日本語字幕で見て、話の流れや内容を把握する。2回目は、英語音声・英語字幕で見て、英語の字幕を追って内容把握につとめる。3回目は、英語音声・字幕なしで見て、どこまで自分が聞き取れるのか試してみる。4回目は、日本語音声・英語字幕で見て、日本語で意味を取りながら英語字幕を読んでみる。

英語に慣れないうちは、英語音声、字幕なしで視聴している途中で寝てしまうことが多いかもしれない。授業で一部のシーンを日本語音声・英語字幕で見せた時に、吹替音声が不自然に感じたのか、一部の学生が笑い出したこともある（昔、芸人がビバリーヒルズ青春白書の役を面白おかしく演じていたのを思い出す）。私も最初は面白半分でやってみたが、日本語でほとんどの情報をすんなり耳から取り入れることができるので、英語字幕を読む余裕があったし「吹替ではこの表現をこう訳しているのか」等、新たな発見があって面白かった。

日本語音声・英語字幕に限っていうなら、海外向けに英語字幕付きで販売されている邦画や日本のドラマを利用して見るのも良いかもしれない。人気ドラマや映画で話される名セリフがどのように英語で訳されているのかぜひ見てみてほしい。きっと新しい気づきや面白い発見があると思う。

<オススメの映画、海外ドラマ>

最後に、完全に私の主観に基づき、英語学習にオススメの映画や海外ドラマを5本紹介しておきたい。まだ見たことがない人は是非視聴してみてほしい。

- ・『フォレスト・ガンプ／一期一会 (Forrest Gump)』(1995)

トム・ハンクス演じる主人公フォレストのアラバマなまりの英語に加えて、1940年代～1990年代あたりのアメリカの歴史も追えてしまう名作。フォレストの人生から、エルビス・プレスリー、ベトナム戦争、ウォーターゲート事件、反戦運動、ヒッピー運動を垣間見ることができるし、アメリカ南部、アラバマの風景や、首都ワシントンDC、アメリカの大自然なども見ることができる。名セリフは、フォレストの母が病床でフォレストに言う「人生は一箱のチョコレートのようなものだ。何が起こるかわからない（Life is like a box of chocolates. You never know what you are going to get.）」。

・『デビルを着た悪魔（The Devil Wears Prada）』（2006）

メリル・ストリープ演じるファッション雑誌の編集長と、アン・ハサウェイ演じる主人公でアシスタントのアンドレアのかけ合いが面白い。ファッション雑誌の出版社が舞台ということもあり、スタイルッシュで色合い豊かな衣装が印象的である。ニューヨークの都市部の生活を身近に感じてみたい人にオススメ。メリル・ストリープが会話を切りたい時にさらっと言い放つ「それだけよ／以上よ（That's all.）」がたまらない（上司に極力言われたくないセリフであるが）。アンドレアの最後の選択も、自分に当てはめて考えてみるとハッとさせられるところがあるかもしれない。

・『マイ・インターン（My Intern）』（2015）

アン・ハサウェイ演じるファッションサイトの運営会社のCEO、ロバート・デニーロ演じる70歳のインターン、ベンのかけ合いが楽しめるコメディ映画である。これもニューヨークの都市部の生活を垣間見ることができるし、ベンのワードローブが素敵すぎてたまらないし、ベンと若者たちの対話、信頼関係の構築法には感服させられた。映画を見終わる前に皆、きっとベンのファンになってしまうことだろう。ベンの紳士ぶりは「ハンカチを持ち歩く一番の理由は貸すためだよ（The best reason to carry a handkerchief is to lend it.）」というセリフからも読み取れる。

・『グリー（Glee）』（2009～2015）全6シーズン

オハイオ州北西部の町、ライマにあるウィリアム・マッキンリー高校のグリークラブを舞台にしたミュージカルスタイルのコメディドラマである。高校生ならではのイジメや、差別発言なども多く見られるため教材としてはどうかと思われるがちだが、全体を通して展開が早いので飽きないし、何より歌が上手いし、ティーネージャーが使う英語が学べるのが良い。日本の学校システムと比較してアメリカの高校のシステムを説明するのにも使える。

・『スーツ（SUITS）』（2011～2019）全9シーズン

ニューヨーク、マンハッタンの大手法律事務所に働く弁護士たちの仕事ぶりを描いたド

ラマである。法律用語は難しいかもしれないが、ビジネス・シーンにおける駆け引きなど、ビジネス英語を学ぶ上で使えそうな表現がたくさんある。スーツ（Suits）が似合う男女たちが訴訟（Suits）準備をする近代的なオフィスにもあこがれを感じる人はたくさんいるのではないだろうか。これは余談だが、最近王室離脱を発表したメーガン妃は、俳優時代にこのドラマのレギュラーとしてバラ・リーガルのレイチェル・ゼインを演じていた。とても共感が持てるので、彼女の活躍ぶりをぜひ見てみてほしい。

<おわりに>

さて、これまで好き勝手に映画や海外ドラマを使った英語学習法について綴らせていただいたが、いかがだっただろうか。

思い出話になるが、中学1年生の初っ端から英語に躊躇、アルファベットや単語を覚えるのに苦手意識を感じていた私が、英語学習に熱心になったのはまず、中学2年以降に教わった英語の先生に影響を受けたからである。先生はギターの弾き語りが上手な方で、ビートルズやミスター・ビッグ、カーペンターズなどの名曲を通して、英語の楽しさを教えてくれた。

英語を通してスムーズに色んな人とコミュニケーションを取れるようになりたい、そうした思いから、高校では、その当時まだ珍しい存在であった、広島県の公立高校の国際科に進んだ。その国際科で私が楽しんだ授業のひとつが、今回紹介した学習法のもととなるLL授業であった。そこでは、最新のレーザーディスク（日本語字幕、英語字幕）で映像を視聴し、その映像の一部分をカセットテープに録音し、家で繰り返し聞いて学習した。まだ家庭のテレビはブラウン管、録画はビデオデッキの時代である。試験前は、ビデオレンタルで映画を借りてきては、日本語字幕部分が見えないようテレビの下側に新聞紙を貼り付け、文字通りテレビにかじりついて必死に英語を聞き取った。ディズニーのアニメ映画『アラジン』や、先に紹介した『フォレスト・ガンプ』とはこの授業で出会った。

アメリカの高校に1年留学する前も、洋楽を聞いたり、金曜ロードショーや日曜洋画劇場で放映された映画をビデオ録画したもので英語音声にして見たり、日常生活のどこかに英語を取り入れる生活をしていた。英語音声にして映画を見る、というのはなかなか大変で、英語を聞き取ることに全神経を集中するのだが、最初のうちは睡魔に負けないようにするのが精一杯だった。忘れもしないのは、当時流行したウイル・スミスとトニー・リー・ジョーンズ主演のSFアクション映画『メン・イン・ブラック（Men In Black）』（1997）の視聴中に寝落ちしたことだ。

高校留学中は、ホストマザーに頼んで、テレビに難聴の人のための英語字幕が出るようにしてもらい、10歳下のホストシスターと一緒に子供向けテレビ番組を視聴した。また、留学ならではの経験だが、友人との会話で知らない表現が出てきたときは説明してもらいい、ひたすら友人の使い方を真似たりした。あえて会話に初めて学んだ表現を入れ込んでみたりして。当時あった電子辞書は簡易的なもので、使いものにならなかつたので、最初

はポケット辞書を持ち歩いて、分からぬ語句はひたすらメモをした。おかげで日常英会話表現やイディオムには強くなった。

学生時代に半年間過ごしたイギリスでは、イギリス英語に悩まされた（それまで自分が学んできた英語がアメリカ英語ベースであったため、本当に聞き取れなかつた）が、その際に活用したのもまた、シリーズもののドラマであった。毎週課されるリーディング、それをベースにしたエッセイ・ライティング、毎週のチュートリアルでのディスカッション。相手が話していることが理解できないためディスカッションに加わることもできず、挫折感を味わつた。それでも家に帰るとテレビのドラマを視聴し、ドラマを通してイギリス英語に耳を慣らすだけでなく、現地の大学の授業だけでは学ぶことはできないイギリス英語ならではの表現を学んだ。

その当時はまだビデオ（VHS）、そしてDVDが出てきた時代であった。インターネットだって、ダイヤル回線でメールの送受信ができるくらいのものだった。それと比べると、今は高速のインターネットを通して色々なドラマや洋画をもっと身近に感じられて良いなと思う。今や飛行機でもVODで好きな映画やドラマが視聴できる時代だ。こうした便利な技術をどんどん活用して、私が今回紹介した方法も含め、自分で色々な方法を試して、自分に合う学習法をぜひ見つけ出していくってほしい。なんでも、楽しんとするのが一番なんじゃないかな。

第2章 フルブライターの体験的英語学習

2.1 Where there is a will, there is away: 英語修得と留学への道のり

山本 恵里子

元相山女学園大学文学部教授、元全米日系人博物館プロジェクト主任
(フルブライト: UCLA 研究員 1998-99 年)
(イースト・ウエスト・センター: Ph.D. Grantee 1982-1986 年)

英語の達人をめざそう！

アメリカで Ph.D. を取得し、日本の大学で教え始めたのはもう 30 年以上前のことになる。自分の学生時代がそんなに遠い過去とは思えないのだが、確実に時は流れ、英語の学び方も教え方も激変したと言える。近年教えている学生たちは、All English のクラスで TED Talks のビデオを見、発表や討論をこなし、日常的にパソコンや携帯電話で英語の動画やニュースなどにも触れ、留学生とも交流する。在学中に短期～長期留学を目指すという人も多い。なんとも羨ましい！と思う。

自分の学生時代は、学校で学ぶ英語は受験向けで、パソコンもインターネットも電子辞書もなく、ましてや留学したいと思ってもチャンスは稀だった。生きた英語を学びたい、英語を駆使できるようになりたい、と思っても容易ではなかった。今振り返ると、10 代から 20 代の頃はハングリー精神に溢れていた。

長い道のりだったが、自己流の学習法で大学 3 年次に実用英検 1 級、4 年次に TOEFL603 点取得までたどり着き、サンケイ・スカラシップという 1 年間の全額給費留学奨学金を得られたのが突破口だった。アメリカへの憧れがアメリカ研究に私を導き、英語はいつしかその必要手段となった。アメリカ留学 1 年を過ぎてから再び TOEFL を受けたらスコアは 633 点に伸びた。そのお陰であろうが、博士課程はイースト・ウエスト・センターの全額奨学金を 4 年間分もらい、ハワイ大学で学ばせてもらえた。それ以降、アメリカ研究と英語から切り離せない生活を送ってきた。アメリカで働いたり、国際学会で発表するにも英語は必需品である。数年前試しに受けた TOEIC では 990 点を取れたので、何とか英語力はキープできているようだ。

英語とは程遠い環境で、しかも（教育熱心だが）留学反対の家庭に育ったため、親のサポート

ートを取り付けることはあきらめ、求める方向に自力で進もうと思った。英語はその手段でもあった。Low-tech の時代に私が実行した英語学習方法は現代の若い世代に役立つかわからないが、わずかでも参考にしていただければ嬉しい。何よりも伝えたいメッセージは、“Where there is a will, there is a way.” ということである。今や英語力を伸ばすチャンスは昔の何百倍もあり、そして英語運用能力はこれからの中間社会を生きる者には必需品ともいえる。パッションをもってほしい。日頃、授業でも「帰国子女でなくても英語力は伸ばせる！」と学生たちに激励を送っている。

振り返れば、私の英語上達法の基本は、「深い興味」「多大なインプット」「アウトプットの機会を増やす自助努力」の3点だったと思う。専門的なメソッドを用いた訳ではなく、英語が好きでうまくなりたかったので、授業以外に大量の読書やリスニングなどを自分でやり、インプットを増やした。昨年 Dr. Stephen D. Krashen の講演会で Self-Selected Reading の方法・効用をうかがったとき、自分の学習法にもそれを取り入れていたと感じ、自己流強法を肯定された気分だった。しかしアウトプットを増やすのは容易ではなかった。このプロセスを述べるとライフ・ストーリーのようになるのだが、お許しいただき、英語との付き合いを時系列で振り返らせていただく。

幼少期～中学時代まで—Gradual Awakening through English

戦後の混乱もはるか昔のことになり、ベビーブームも去ったころ、私は金沢に近い石川県松任町（現白山市）に生まれた。戦争経験者の父母は地方での安住を求め、根上町（現能美市）に家を買い、私をその跡取娘と決め込んでいた。根上町は（後に松井秀樹の出身地として知られるようになるが）人口1万人ほどの小さな町で、外国文化のかけらもなかった。

父は元々国鉄の技師で、県外・国外で働いたこともあり、英語と中国語が多少できたようだが、私の知る限りでは、ささやかな家庭生活を享受する保守的な父親だった。母も、女学校・専攻科を出たものの、戦争のせいで青春時代は真っ暗闇だったと言い、それゆえ戦後はサラリーマンの妻として専業主婦生活に満足と安定を求めた。そんな両親にとって、年を取ってから生まれた一人娘は、自分たちのささやかで安定した家庭生活の重要な構成員だった。物心つく前から「地元の国立大学教育学部に行って小学校教師になり、婿養子をもらい、この家の跡をとること」とすでに決められていた。海外どころか県外に出ることさえ禁句であった。

しかし1960年代初頭にはテレビも普及しはじめ、その他新聞・本・漫画で情報が溢れていた。ポスト・ベビーブーマーの世代としては、戦後の混乱の時代も知らず、普通教育と経済成長の恩恵を受けて育ったから、なんでもできそうな期待感を持っていた。けれども日本はまだそれほど豊かではないから、海外旅行や留学が夢物語のような時代だった。安保闘争の頃は幼すぎてよく意味が分からず、なぜアメリカが悪く言われるのかと不思議に思った。テレビや漫画にててくる外国文化、特にアメリカ文化は輝いてみえた。日本語吹替え版ではあったが、『ラッキー』やディズニーのアニメに感動した。

田舎町の公立学校の生徒にとって、英語は中1から学ぶものに決まっていた。幼児英語教育も小学生向け英語塾も皆無だった。唯一小学校時代に私の英語への関心をはっきりと高めてくれたのは、二冊の辞書だった。「わからない単語を辞書で引くといい」と言って、両親が私に「外来語辞典」、次に「三省堂和英辞典」を買ってくれた。外来語辞典は使いやすく、自分で興味をもったカタカナ語を調べると英語の綴りや意味が分かる。小学校ではヘボン式ローマ字表記としてまずアルファベットを学ぶため、例えばアイスクリームが ice cream と綴られるのにさえ驚いた。三省堂のクラウン和英辞典は、当時ローマ字で日本語の単語を引くため、かなり不便だった。発音なども載っていない。今ならスマートフォンで簡単に検索できるし、音声で話しても訳してくれるほどだが。それでも「辞書を引く」という習慣が、私に外国語への興味を持たせてくれたのは確かだ。

わずかながら英語への関心を胸に中学に入り、幸運だったのは英語の先生が素晴らしいことだ。1年から担当していただいた小野秀子先生は、文法や単語、例文を各章できちんとまとめて板書し、ノートを取りやすくしてくださり、説明や練習もあったので、大変わかりやすかった。他の教科よりずっと楽しく、テストも苦痛ではない。管理教育と高校受験の暗雲が中学生活に立ち込めていたが、英語は世界への窓口となる実学のように思え、別格であった。

とはいっても、地方の公立中学で学ぶ英語でゼロから学ぶのだから、レベルは知れている。授業中、たまにオープンリールのテープレコーダーから流れるネイティブの発音がすばらしく聞こえた。生徒の大半は一生同じ地域で生活し、狭い世界に生きるので、英語は絵にかいれた餅である。それを危惧されてか、小野先生は「ペンフレンドを見つけて海外文通しよう」と提案され、希望者にペンフレンド・サービスの案内をしてくださった。わずかの手数料を協会に払うと海外のペンドルが見つかり、文通が始まる。私はマレーシア人の男の子だった。おそらく向こうも英語を勉強したかったのではないだろうか。自己紹介文と封筒の書き方の手ほどきを受け、手紙を出すと、見事な筆記体で書かれた英語のエアログラムが届いた。わかる限り自分で日本語に訳し、返事は自分の英語力で書いて、先生に添削をお願いすると、「自分でやったの？すごいね」と褒めてくださった。このペンドルとの文通は確かに大学に入るころまで続いていた。Eメールもない時代によくやったものだと思う。（船便かエメールか、という選択肢だった。）この文通のお陰で英語の勉強がいかに実用的か、違う国の人とコミュニケーションを可能にし、自分の世界を広げてくれる道具であるかを実感した。

学校でリスニングやスピーキングを鍛える機会は皆無だったし、英会話学校があるわけでもない。NHK教育テレビの『テレビ英会話』を見るようになった。「初級」で覚えているのは田崎清忠先生とアシスタントのマーシャ・クラッカワーさん。ビデオ録画などないから、放送されるのを見るしかなかったが、そのうちカセット・テープレコーダーを親に買ってもらい、テレビ英会話の音声を録音して聞けるようになった。カセットテープが貴重だったため、ある程度聞くと消して、その上から新しいのを録音するしかなかった。次第に中級にも興味が湧き、ナチュラル・スピードの英語を聞きかじるようになった。このNHKテレビ英

会話番組には高校時代に入ってもずっとお世話になるのだった。

高校受験となった時、都会の高校に行きたいと思ったが、選択肢になるはずもない。担任の先生が「なんでも相談に乗る」というので相談したところ、大笑いされ、しかも両親には「バカげた考えを持っているので、しっかり釘をさしておきました」と電話をされた。私が家を離れたいと思っていると知った両親は動搖し、「絶対に家から通える高校。大学も家から通える大学。まあ大学は合格しなければ県外もありうるが」と説得した。私としては「じゃあ大学までの辛抱だ」と解釈したのだった。

高校時代—Stuck in Ishikawa

隣の市にある県立の進学校に入った。地元の町よりはずっと都会であった。学区内では一番の進学校だったから、教える側も学ぶ側も受験科目に力を入れ、テストで点数を取れるようになるのが目標という雰囲気であった。英語は主要な受験科目だから、講読・文法・作文の授業で基礎をしっかりと学んだのは有益だった。しかしリスニングや発音は一部の大学・学部でしか課さなかったので、授業で学ぶことは稀だった。受験用の学力を伸ばしてくれるのが「よい先生」といわれたが、英語の先生方はそれに加え広い見聞と教養を備えていらっしゃった。矢原珠美子先生と木谷泰先生のお二人には、特によくお世話になった。

お陰で私は受験英語も楽しくこなし、英語に関しては学内でもトップレベルだった。国立大学を目指し他の科目にも力を入れたらよいと言われたが、数学や（暗記科目と言われる）日本史・世界史には興味がなかった。後に職業で歴史研究をするなど想像もしていなかった。生徒会活動とフォークソングを楽しみながら、親からの自立を目論んでいた。

英語を自由に操りたい。そのためには留学がしたい、と思った。原因の一つは、別のクラスの同級生が1年生の夏休みからスイスに転校したことだった。その女子生徒の家は、病院経営もする著名な医者一族で、父も医者、母は津田塾の英文出身だと聞いていた。それでも短期留学をしていたそうだが、高1では夏に留学し、そのままスイスの高校に入ったという。その子のクラスにいた友人が、噂を伝えてくれる度、ため息がでた。結局彼女はスイスの高校卒業後、ハーバード大学、ミネソタ大大学院に進むのだが、「夏休みにスイス留学」「スイスの高校に転校」というだけで皆の羨望の的になった。

私は地道に田舎で英語を勉強する身だったから、もちろんご本人が優秀なこともあるが、生まれた家柄や親の教育方針で早くから留学チャンスに恵まれる人がいるということに、かなりのショックをうけた。まだ1ドルが360円の時代で、日本の普通のサラリーマン家庭の子供が長期留学というのは夢のまた夢であった。

当時テレビでは「同時通訳者」として鳥飼久美子氏が注目を浴びていた。彼女の手記を読んだら、高校時代AFSで留学したのがすべての始まりと書いてあった。私の高校の方針は、「留学すると留年するし、受験にもむしろ不利」として生徒には薦めていなかった。（これは今でも同じらしい。）1年生の後半に募集案内を見て、担任に（親の了承も得たと嘘をつ

いて）応募したいと申し出ると、「まあ1年生で応募するなら、帰ってきても受験に間に合う」と受け付けてもらえた。生徒会の役員もやっていたし、英語の成績からいえば学校推薦（1名枠）に選ばれる可能性があるかと期待していたが、その年のもう一人の応募者は、なんと開学以来の秀才と噂された、学年トップの女子生徒だった。後には全国模試で1桁台の順位を得るほど優秀だったから、当然ながら彼女が学校推薦を得た。その彼女さえ最終選考は通らなかった。（もしかしたら辞退したのであろうか？結局彼女は東大文I卒業後、国家公務員を経てフルプライドでロースクールに留学し、現在はワシントンDC近辺で弁護士として活躍していると聞く。）

AFSの望みは断たれた。高2の夏には県か市主催のアメリカ短期研修旅行があり、学校経由で参加者が募集された。かなりの金額だった。私は両親に嘆願したが、却下された。海外なんて危ないところに、なぜわざわざ金を払って子供を行かせる必要があるのか、と。おそらく外の世界を見させないためだったのだろう。

私費での留学は望むべくもないし、公費留学は枠が狭い。高校時代に留学の夢は叶いそうになかった。大学でまず県外に脱出し、いつかは留学するのだとの漠然とした計画を胸に、受験勉強と英語力の研鑽を続けた。

英語の勉強は高校での受験英語の他、読解とリスニングを自己流で磨いた。リーダーの教科書に出て来る筆者や作品で興味を感じたものを中心に、自分で洋書を買い読んだ。『星の王子様』やサマーセット・モームの作品、ジョン・F・ケネディのスピーチ集など、速読はできなかつたが、訳さずそのまま理解する訓練になった。（同志社大の講読の授業で、学生に「多読」プログラムをオプションで課しているが、自分の経験上、役立つと信じてのことである。）

NHKの『テレビ英会話』はずっと私の無料の英会話学校であった。高校時代には主に中級を見て、初級は補助的にみる程度になった。中級は「早すぎてよくわからない」と思いながらも、内容がアメリカの歴史や文化、日本社会に言及するものもあり、学ぶことが多かつた。小浪充先生の番組では、アメリカの留学生（確かプリンストン大の大学院生か研究者）が日本の歴史についてスピーチしていた。そして何より影響を受けたのが、國弘正雄先生のTalk Showである。様々なゲストに國弘先生がナチュラル・スピードの流暢な英語で、突っ込んだインタビューをされる。相槌の打ち方にも非日本的な雰囲気を感じた。おそらくこれが私のリスニング力を最も鍛えてくれた。カセット・テープに吹き込んだものを、スクリプトもなしにただ何度も（おそらく何十回・何百回？も）聞き続けたのは、インプットの量からしてかなりであったと思う。睡眠中に英語を流す枕が宣伝されていたので、カセットプレーヤーでオート・リバース機能を役立て、子守唄代わりに「中級」を聞いていた。この「寝る前に英語を聞く」という習慣は、大学に入ってからもずっと続けた。初めはわからない文も、何度も聞くうちに聞き取れるようになる。慣れてくるとシャドーイングもできるようになるというか、自然に口をついて出ると感じた。

國弘先生の対談相手は、ユニークな背景を持つ素晴らしい方たちであった。（高校時代か

大学時代かは思い出せないのだが）日系アメリカ人三世の Daniel Okimoto 博士、「セサミストリート」制作会社の Children's Television Workshop の方々との対談が特に記憶に残っている。Okimoto 氏の自伝、『仮面のアメリカ人』は大学時代に日本語訳で読み、日系人の歴史に興味を持つ契機ともなった。ずっと後に彼の妹さんとアメリカの学会でお会いする機会を得たとき、感激もひとしおであった。興味深い内容の Talk show をレベルが高くても聞き続ける、というのはリスニング力強化に効果的だったと思う。古い Talk Show のいくつかがインターネット上に出ており、先日聞いてみたらところ、やはり素晴らしい内容だと感激を新たにした。現代の学生なら、TED Talks などを無料でいつでもどこでも、好きなだけ見ることができるから、それを利用すればいいだろう。

大学進学－Which Way to Go?

当時大学で英語を学びたいと思うと、英文学科に入るのが普通だった。今どき溢れている「国際」系や「グローバル」系の専攻はほぼ存在しなかった。高校の英語の先生も英文学出身の時代。実用英語を学ぶには外国人教員の多い大学とか語学系に行かなければならないだろうと想定していた。また、女子のほとんどは文系で、四年制大学に行くのなら（法学・経済学などは男子のものと思われていたので）文学か教育が無難な専攻と思われている時代であった。

選択肢が少ない上、インターネットのないあの時代、各大学の情報は受験案内のパックに添付されているパンフレット以外、本当に少なかった。大学受験案内の本には、各大学につき短い説明（沿革・専攻・受験情報）が載っているだけだ。後は予備校による受験難易度のランク表を見ながら、志望校を考える。カリキュラム内容や教員名、留学制度の有無など確かめる術もなく、大学を印象で決めるようなものだった。

当時、国公立と私立は授業料の差が顕著だったので、高校の方針は（今もそうだと言われるが）「親孝行のためにも国公立を第一・第二志望に」であった。両親は私が地元の「自宅通学できる」国立大学（当時の一期校）を第一志望にすることを当然視していたし、父がすでに定年退職していたから家計的な制約も目に見えていた。絶対に地元から出たいと画策している私には、キリスト教系私大がよく見えたし進めてくださる先生もいたが、なるべく経済的負担がなく親の賛同も得えられる可能性が高いのでは、と薦められたのが、神戸外大だった。授業料は年間僅か 36,000 円で国立の半額だった。（その前年度までは驚異の 18,000 円だった。）異国風な港町にある、「少数教育」を謳う公立外国語大ということで、北陸の人間にはポジティブなイメージがあった。私としてはキリスト教系の私立大学に行くつもりだったが、「地元からでるならせめて国公立に行って親孝行しろ」と進路指導の先生に言われ、中途半端に孝行心が出たせいもあり、3 月末の土壇場で人生の大決断をしてしまった。外国語大学に行けば思う存分生きた英語が学べるに違いないと信じていた。

大学時代－Struggling to master English

当時「五月病」という言葉が流行していた。受験勉強を終え大学入学を果たした大学1年生が、幻滅を感じ、五月頃にうつ状態に落ち込む状態を指した。当時は入学前に大学の情報がほとんどなかったから、現実をみて驚いた新入生は今よりはるかに多かったんだろう。

私の場合は四月病かといえるほど、入学してすぐに幻滅をしてうつ状態になった。週6コマは専攻言語の必修授業があるが、文学の講読3コマ、文法1、作文1、（老外国人講師による）英会話1だったと記憶している。すべて40人クラスで、そのうち女子が四分の三、1~4年次までずっと同じメンバーのままで授業を受けるという。文学の授業では、1冊のabridged versionの薄くて簡単になった英語の教科書を、1年間（4月~2月初めまでの約26週間、週1回90分授業）かけて、毎回2~3頁ずつ口頭で日本語訳していく。決して教科書の最後まで辿りつことはなかった。ディスカッションも発表もない。試験が年2回、テキストからの文を翻訳し、それで成績が決まる。英語学（文法）の授業では、著名教授が前置詞の特殊用法について講義されたが、実用性はほぼ皆無に思われた。英会話も同じく40人クラスでやるから、90分授業で1回あたって発言すればよい方だった。これが少数教育と呼ばれるのか？と詐欺にあったような気がした。

中学時代から勉強した英語を、大学で開花させようと楽しみにしていたのだが、ガッカリする授業内容の他、留学制度皆無、ネイティブの教授ゼロ（年配の英会話講師が2名ほど）、語学自習室などの設備も無い現実に打ちひしがれる。落ち込んだ人が何人かいた。同じ高校から来て他学科に入った友人は、5月ごろから休学し下宿も引きはらった。クラスメートの一人が随分落ち込み（正確な原因はわからないが）1年の春休み中に自殺したことは、大きな出来事だった。私は転学を考えたが、学期末試験と転学試験が重るので留年覚悟となることがわかり、もはやここで4年間過ごしながら、アメリカ留学か大学院進学を目指そう、と心に決めた。（ちなみに大学の名誉のために付け加えるが、「私はこの大学に入学したくて入学し、大学生活に大変満足し楽しんでいる」と主張するクラスメートもいた。）

クラスメートは、皆英語が好きでまじめだった。留学経験などはなくとも受験勉強を頑張り、英語力を伸ばして、大学で専攻するに至った人たちだった。大学からのサポートがない分、英語検定や留学の情報交換をし研鑽しあった。勉強会などはやらなかつたが、各自実用英検1級合格を目指し、問題集を解いて受験した。当時は準1級がないから、いきなり1級というのはかなりハードルが高かった。合格すれば実力が証明されたと感じたが、在学中に合格できない人もいた。私は大学3年で受験したところ、春は筆記試験不合格だったので、問題集をさらにやって、秋に筆記・面接とも合格を果たした。東京での表彰式に呼ばれたが用事でいけなくなり、どんな結果だったのか知らずじまいとなった。

TOEFLは当時でも受験料が高額だったので、大学4年春によく身銭を切って受験した。今でいうPBT式のタイプのみだったが、初挑戦で603点を取得した。600点あればアメリカの大学に行ってもついていけると言われていたから、自力で勉強した成果が一応そこに顕れたかと思い、やや安堵した。もちろん、留学すればもっと簡単に、もっと伸びたか

もしそれなのに、という思いもあった。

大学の授業へのフラストレーションは、私のハングリー精神（アングリー精神？）につながった。ほとんどすべての授業は日本語で行われ、ネイティブの先生の会話クラスが週1回ある程度だった。専攻の授業を通し、私の学びたいものは文学でも英語学でもなく、アメリカ文化だと感じるようになったが、英・米文化の授業がそれぞれ1クラス開講されているのみだった。文化人類学・社会人類学の本をかじり、3年ではゼミを「社会学」にした。文学・語学のゼミが大半だったので、それ以外はマイナーなゼミとみなされていたが、そこでアメリカ文化・社会のこと学びながら、留学できることを願った。

英語力を伸ばすため、地道で質素な努力を続けた。相変わらず NHK の Talk Show を見たり、その録音を毎日聞くほか、大学図書館から英語のテープを借りて自宅で何度も聞いた。こちらはレベル的にはずっと下で、研究社の英会話のテープとかだった。図書館のオーディオ・セクションにあった英語のテープはおそらくすべて聞き、もっと種類があればいいのにと物足りなく感じた。当時は自分で英語教材を買うと高額だったので手が出なかった。

英会話学校も同じである。神戸はさすがに都会で、あちこちに英会話学校があったが、調べると入学金・授業料が高い。そんなことなら留学のために貯金しようと、耐貧生活をし、教会のバイブルクラスなど、ネイティブに教えてもらえる無料クラスを利用した。宗教への勧誘もあったが、それはお断りし続けた。

お金を払って受講したのは、タイプ教室であった。中学時代に無理を言って親に買ってもらったブラザーのマニュアル式タイプライターを、自分で練習して打てるようになっていたつもりだが、正確な指使いを矯正しスピードアップすることが重要だと言われた。当時、女性はタイピストまたは外資系で秘書になる場合、毎分何ワード以上でタイプできると就職に有利だとされた。今なら Excel、Word などのパソコン講習会を受講するようなものだろう。大学でタイピングを教えてくれることは皆無だったから、自前でタイプ教室に行き、両手を使ってブラインド・タイピングできるようになった。後にアメリカ留学中ペーパーや卒業論文を書かねばならないとき、大変助かった。その後ワープロ、パソコンと移り、役立つ機会は拡大した。（最近日本の大学生で、スマホ入力はできるがパソコンが両手入力できない学生がいる。楽しく学べるタイピング練習のソフトウェアがあるから、日本の中・高で必修にしてもよいのでは、と思う。）

留学への情熱—Desperate to Study in the U.S.

大学では留学制度が長期・短期、受入れ・派遣とも皆無だったが、「学費で浮いたお金で留学すればいい」という人が多かった。しかし私の家の事情に当てはまらなかった。自宅外の大学に行っただけも予定外だった両親は、私が卒業後地元に戻り、中高の英語教員になることを待ち望んでいた。私も県外にでることを説得する際、4年後に帰るからと言っていた。月3万(と言っても毎月ではなかった)の仕送りと2つの育英会奨学金、月1万円ほどの家

家庭教師のアルバイト収入から、昼は学食で 270 円の定食より 90 円の素うどんにし、後は自炊して、残りを貯金し留学資金にした。実家では帰りを待つ母が、着物や帯などせっせと買っていた。着物はいらないから留学させてほしい、と言っても無駄だった。母にとっては、娘に着物を買うことが楽しみでもあり、愛情表現だと思っていたようである。

1 年生の夏休みに前に、外部からの「スタンフォード大学夏期英語研修」の説明会があった。各国からの留学生が参加するアメリカ英語と文化を学ぶ集中プログラムとのことで、是非とも参加したかったが、確か 30 万円をはるかに超えていた。それまでに貯まっていた貯金では全く足りないので、泣く泣く見送った。(私の当時の部屋代が毎月 1 万円だったから、3 年分ほどに匹敵するわけである。) 必死に貯金し、1 年生の終わる頃には 20 万円近く貯まつたので、転学も編入もあきらめ、春休み中に短期留学しようと思った。親せきからの餞別を見込んで、一番お手頃な 1 か月のホームステイ・プログラムを選んだ。「1 カ月でも英語力はかなり伸びますよ」という旅行代理店の話に期待をかけていた。

人生初の海外旅行は、往路でロサンゼルス観光をし、4 週間サンディエゴのホームステイの後ホノルルに一泊するというものだった。(後にこれらの都市に長期住むことになろうとは、予想もしていなかった。) 平日午前中は教会の奥の部屋で、簡単な英会話の授業がある程度だが、アイルランド系アメリカ人の大家族ホストファミリーとの生活は、すべてが目新しく楽しかった。自分の発話力不足を実感した他、鍛えていたはずのリスニング力も不十分だと分った。ロスの自由行動中に乗った市バスでは、運転手の英語が聞き取れず帰り道がわからなくなってしまった。日本で学んだ英語力の限界を痛感しているうちに、滞在は終了した。英語力の伸びは実感できず、やはり半年とか 1 年は留学しなければ、という思いが一層強くなった。英語の発音もアメリカン・イングリッシュになるべく統一することにした。(近年は World Englishes ということで、発音やアクセントを気にしなくてもよいという考え方もあるらしいが、私は自分で統一性を持たせるため、アメリカを選んだ。)

長期留学は以前ほどエリート層に限られていたわけではなかったが、学部生用の留学奨学金は多くなかった。2 年次によくロータリー奨学金とサンケイ奨学金の 2 つの存在を知り、まずはサンケイにチャレンジした。産経新聞社主催の「サンケイ・スカラシップ」は、その当時イギリス・アメリカ・フランス・ドイツの 4 か国へ(基本) 4 名ずつを全額給費生として派遣するものだった。アメリカの倍率が一番高く、800~1000 名前後が受験し、イギリスはその三分の二以下だったと記憶している。1 年次に受けているクラスメートは、「無理。競争が激しすぎる」と諦めた。けれども 1000 円だったかの受験料を払えば、大学生ならだれでも受けられるという民主的なシステムだった。神戸大生はチャレンジ精神が少ないので力不足なのか、合格者は過去に 1 名のみ。東大や上智が多数輩出していた。ここであきらめてはいけない。私にとって数少ないチャンスだ。

1970 年代当時、アメリカは経済力・政治影響力ともに世界ナンバーワンだった。ベトナム戦争でいかにイメージが失墜しようとも、アメリカ文化は輝いて見えた。倍率がどうであろうとアメリカに決め、サンケイを受験。神戸大の会場だけでも大講義室が一杯になるほど

の受験生だった。全国の応募者から、筆記合格者は各国それぞれ 20 人のみ。結果は産経新聞朝刊に発表されるのだが、合格者の中に自分の名前はなかった。

ロータリー奨学金なら、地区のクラブから推薦を得れば面接に進めるので、かなり確率が高いらしいと聞き、石川県の地元で応募し、中部地区の面接に進んだ。今度こそはと思って面接を待っているとき、待合室にいる二人の女子学生が話を始めた。一人は東大の大学院生、もう一人は上智大の 4 年生とのこと。留学希望先や、学びたい内容を横で聞いていた私は、彼らの準備周到さに圧倒され、不安でいっぱいになった。自分の志望動機・計画の脆弱さは明らかだった。アメリカ文化を学びたいからと、専攻でもない文化人類学や社会人類学に言及していたが、当時中根千枝氏や米山俊直氏の本でかじっていた程度だった。面接を待つ間にすっかり自信を無くした私は、実際の面接で暗示にかかったように硬直し、専門知識の不足を露呈した。

やはり平等にチャンスを与えるサンケイ奨学金がよい、と 3 年次には一般教養の問題集（就職用）にも取り組んで準備した。筆記試験では手ごたえを感じたのに、20 人の合格者の中には含まれなかつた。その頃実用英検 1 級にも受かったが、その程度ではあの競争に勝てない。

自宅でカセットテープ・プレーヤーを使ったリスニング練習に加え、英語の映画を見るため三宮の映画館によく通った。大学 3 年頃、画期的な出来事としてテレビで「二か国語放送」が始まった。今では当たり前だが、当時ニュースや洋画が英語でも聞けるなんて信じられない進歩だった。当時テレビで見る洋画は日本語吹替え版が多かった。多重放送テレビは高額すぎるので、ソニーの二か国語放送受信できるラジカセを購入し、そこから音声を拾い、古いテレビで映像をみるという手を使った。映画の他、『チャーリーズ・エンジェルズ』、『ベガス』などのテレビドラマのシリーズがバイリンクル放送されたので、映画館に行く必要はなくなった。

こんな地道な努力を重ねるうち、大学 4 年になった。就活に行けば女子学生の求人は男子学生とは別枠であり、女子は職種も限られている上、下宿生は応募不可というのも多かつた。あからさまな差別に嫌気がさし、大学院進学を第一希望にしたところ、就職課が「進学希望者には斡旋しない」と言ってきた。内定を蹴られると翌年に響くから、教員採用試験のみにすべしとのことだった。サンケイ奨学金を 4 年次で応募するには、「大学院進学希望者のみ」という条件が付いていた。必然的に大学院と留学を目指しながら、教員採用試験を受験することになった。4 年次の初めの TOEFL603 点というスコアに反映される英語力が武器になったのか、教員採用試験（高校英語）2 つと筑波大大学院修士課程（地域研究研究科アメリカ研究）に合格し、サンケイ奨学金もついに筆記試験を通過した。

私の記憶では、その年サンケイ奨学金の米国への志願者は 880 人だった。その上位 20 人に食い込めて、喜びが押し寄せる同時に、ロータリー奨学金の面接での苦い経験が思い起こされた。今度のチャンスを逃すわけにはいかない、と面接はできる限り準備周到で向かった。自分の学びたいこと、将来やりたいことについて、明確なヴィジョンを持っていなければ

ばならない。確か大阪のアメリカン・センターに行って大学の資料を調べ（インターネットなどないので）、二次試験のための書類を仕上げたと記憶している。推薦状が2通必要だったが、お願いした教授の一人からは「サンケイは滅多に受からないよ」と書くだけ無駄のような反応をいただいた。「絶対に受かりたいのでは是非お願ひします。筆記試験を通ったので、確率は5人に1人なんです」とお願いし、書いていただいた。

英語の面接に備え、自問自答で練習する。Which universities would you like to study at? Why? What do you plan to study? What is your career goal? What are your future plans? 等々。その頃には「アメリカ研究」という分野に私の心は定まっていた。日本の大学院も筑波大のアメリカ研究に決まっていたから、一貫性があり、説得できる自信があった。

ちなみ神戸大では英語力を伸ばしそうにない授業が多い思いながらも、卒業必要単位数が144だったところを178単位取得したほど、意地になって勉強していた。語学の授業は通年の授業で2単位しかもらえないことを考えると、かなり膨大な数のクラスを取ったことになる。この多大なインプットは無駄なように思えたが、私のあざかり知らぬ形で役に立っていたのかもしれない。

サンケイ・スカラシップの1980年米国派遣組の一人に選ばれたときは、夢のようであった。何年もの糾余曲折を経て、親の経済支援を全く借りずに留学が実現できることになった。教員のポストは丁重にお断りした。とはいって、両親は納得するはずがない。折角受かった石川県の採用試験を是非とも受け入れるようにと、母は神戸まで飛んできて説得した。留学と修士課程を終えてからにする、と言って私は頑なに応じなかった。高校時代から待ち続けた機会をようやく自力で手中にしたのだから、手放すわけにはいかなかった。父は長期入院中、母は自宅と病院を行き来しているような状況であった。良心の呵責に苛まれながらも、実家に帰れば二度と出られなくなるだろうという不安があり、私は我を通さねばならなかつた。

ここまでが、まずは私の日本脱出までのプロセスである。国内で悶々としながら、自己研鑽の形で英語力を伸ばした。しかし、いよいよ願いが叶いアメリカ留学を実現すると、向こうの大学院でさらなる研鑽が必要なことが歴然とする。

クレアモント大学院にて—A Shy Student from Japan

筑波大学大学院ではアメリカ研究の授業が新鮮で楽しかったが、1セメスターのみの慌しい期間であった。指導教官からは、修士2年目に入つてから留学する方がダブルマスターを取れる可能性があるといって、延期を勧められた。けれどもサンケイの派遣時期は延ばしてもらえない。Ezra Vogelの*Japan as No. 1*が教科書だったほど、その頃日本の景気は鰐登りになっていたので、後に別の留学のチャンスが巡ってきたかもしれない。しかし出発することとし、アメリカ人・イギリス人の専任教員の授業や、フルブライト客員教員のレクチャーを受けて、留学準備とした。

サンケイには試験合格後、留学先を決めるために詳しい書類を出すのだが、アメリカ組はフルブライターを扱う団体（IIE）を通して派遣先が決まった。私の場合は既に修士課程に

入っていたので、大学院留学してもよいといわれた。どの地域のどの大学に行っても「全額給費」の建前なので、東部のアイビーリーグでも払ってくれるとのことだった。すでに面接の際ペンシルバニア大学を希望していたので、IIEへの願書にも、ペン大のみ希望とアピールしたが、第2志望として「西のアイビーリーグと呼ばれる」というクレアモントにも願書が送られていた。全く知らなかつたのだが、学部の Claremont Colleges は確かに評判がよいらしい。クレアモントから早々に入学を許可もらったが、GRE スコアが必須のペン大からは一向に返事が来ない。その間に筑波の Paul McClean 先生のアメリカ文化の授業でエスニシティや日系人のことを学び、興味が湧いていた。指導教官からもカリフォルニアに行けば日系人のことを学べるといわれたので、ペン大から返事が来る前に、クレアモントに決めしまった。(ちなみに GRE は TOEFL よりも桁違いに難しかつたので、GRE のスコアが届いてもペンには行けなかつたかもしれない。けれどもアメリカの大学事務室は時折手違いもする場合があるので、あの時国際電話をしてでも尋ねねばよかつたかもしれない。今なら E メールもあることだし、万一留学手続き中にこのような状況になつた場合は絶対にプッシュすることをお勧めする。)

TOEFL の点数が 600 点を超えていたという理由で、サンケイからは「準備用の ESL クラスに参加する必要なし」とされた。必要がある派遣生には費用をサンケイ持ちで参加させてもらえたらしいのだが、私はいきなり 9 月から大学院の正規授業を取ることになった。当時の TOEFL はペーパー・ベースだから、スピーキング力は測られていない。また大学時代、英語のプレゼンテーションもレポートの書き方もトレーニングを受けていない。これをアピールして ESL に入れてもらうべきであったと、後で気づいた。

大学院の授業が始まると、アメリカ人に交じり、アメリカ史やアメリカ文化の授業を取ることとなつた。ノートを取るだけでも大変だったが、アメリカ人には当然のようなことが私にはわかつてない。口頭発表の他、中間ペーパーが課されたので友人に助言を請うと、Chicago Style のマニュアルを進められ、そんな細かい書式のルールがあると初めて知るなど、技術的なことも不足していた。教科書を読んだり、英語でペーパーを書くのは人よりも多く時間を費やせば少しはカバーできたが、大きなハンディは、授業で意見・質問を述べたり、ディスカッションに加わる積極性が足りないことだった。英語のスピーキング力不足のせいもあるが、厚かましいほどに意見を言うアメリカ人学生にとても太刀打ちできなかつた。クレアモントには院の他、5 つのカレッジがあり、そこには競争意識の高いアグレッシブな学生が多かった。学部生が院の授業を取つたり、院生が学部の授業を取ることが可能で、授業によっては学部生に圧倒される時もあった。私は「おとなしすぎる留学生」だった。日本で尖がっていても、アメリカでは控え目過ぎたのだ。

ようやく秋学期を乗り越えたと思ったとたん、1 月初めに日本の父が急逝し、事情が大きく変わつた。一時帰国しサンケイ奨学金の中止も考えたが、何とか継続して派遣期間を全うした。ここまで来たら MA を終えたいと母を説得し、経済的支援をしてもらって、留学をもう 1 年延ばした。母の心理的・経済的負担を考えると心が痛んだが、どうしても卒業した

かった。修士論文を終えるころには、ようやく英語力や自信が一定レベルに達したと自分で感じられるようになった。

ハワイ大と UCLA – After Claremont and Beyond

ここからようやく EWC やフルブライトと関わる話になるが、長くなつたので手短にまとめさせていただく。

クレアモントでの 2 年目には、アメリカの大学院で博士課程をやれる自信が出て、日系人研究とオーラル・ヒストリー研究を続けたいと思った。その頃までには日本語より英語の方が表現しやすいと感じるときもあるほど、英語漬けの生活をしていた。アメリカ留学したままで応募できるイースト・ウエスト・センターの奨学金は、博士課程だと 4 年間カバーされるのが魅力的だった。Full か Partial を選ぶ必要があったが、私には Partial は無理だったので、確率が少くとも Full に固執した。運よく 4 年間の全額給費をもらえることとなり、ハワイ大大学院博士課程でアメリカ研究、EWC で interethnic relations の研究にかかわることになった。クレアモントの日系人の友人が、「日系人研究をやるなら、カリフォルニアとハワイとブラジルをカバーすべきだから、ハワイはよい選択だ」と言ってくれた。

MA 取得後すぐに筑波に戻っていれば、私の進路や研究内容も変わっていたかもしれない。私としては日系人研究をするなら、アジア系アメリカ人研究で著名な UCLA だと思い、歴史研究科の博士課程に出願したところ、入学許可はおりたがファイナンシャル・エイドがもらなかった。レーガン政権下で補助金が減っていたという。フルブライトは一旦帰国しないと応募できなかった。修士後帰国すると言っていたから、母に支援を頼むのは忍びなく、UCLA は断念せざるを得なかった。この頃は、英語力は十分だったが、金銭面は相変わらず問題であった。

ハワイでは博士号取得までに 6 年かかった。桜山女子学園大学に就職したのは 1989 年のことであった。日本経済は豊かになり、女性の雇用機会や地位も向上し、私は浦島太郎状態であった。石川県には戻らなかつたが、日本で就職したことで母は安堵してもらえ、多少は罪滅ぼしができた。しかし、1990 年代には日本から研究や留学で海外に行くのはかなり普通のことになつていていた。アメリカでまた研究したいという熱意はずつと続き、1998 年によくやくフルブライト客員研究員として UCLA に 1 年行けることになった。ユウジ・イチオカ先生に師事することが叶い、UCLA 大学院に行けなかつた無念がようやく晴らせたといえる。

私が英語を学んだ熱意は、親の決めた人生を歩まないという反骨の精神から出てきたかもしれない。両親の期待に添わないことに後ろめたさを感じつつ、また支援を得られない分妥協をしつつ、暗中模索で私は英語を追い求めてきた。それが私を日系人研究に導いたようにも思える。今は、そこまで粘って培った英語力と学位ならば、それを使ってちゃんと研究

しているかというのが問題である。活用しなければ、やはり絵に描いた餅かもしれないと自省するこの頃である。

今の日本の大学では英語教育も充実し、留学の機会も多く、大学院の門戸も男女ともに開かれているから、若い世代の多くは我々の頃より英語力も研究力もずっと優れている。恵まれていると言えるが、それだけにより高いスタンダードが要求され、社会での競争も激しいだろう。そのサポートができればと思いつながらアカデミック・イングリッシュの授業を教え、「英語は必需品だよ」「是非留学するといいよ」などと、彼らにはわかりきったことを説いているこの頃である。蛇足ながら、二人の我が子には「大学でも大学院でも、合格さえすれば奨学金が出なくてもサポートする」といったところ、娘はブリティッシュ・コロンビア大学で4年間を、息子はカリフォルニア大学大学院で2年間を過ごし、卒業した。湯水のように出ていった費用を惜しいと思ったことはない。母は、私に着物を買うことで自分の味わえなかった青春時代の夢を追い、また戦時体験から「着物はいざというときお金の代わりになる」と信じていた。(その多くの着物と帯が、今も使われないままタンスで眠っている。)私は教育と国際的適応力は生涯続く重要な資産だと信じている。近年は高学歴化が進み、修士・博士号も価値が下がりつつあるようだが、先の見えない時代にこそ、視野を広げ国際性と専門性を身につけることはますます重要になるであろう。強い意志と目的をもって進んでほしい。

第2章 フルブライターの体験的英語学習

2.3 私の英語の学び方と留学体験

塙田 守

堀山女学園大学国際コミュニケーション学部教授

(フルブライト：ハワイ大学大学院 1981年—1983年)
(イースト・ウエスト・センター: Ph.D. Grantee 1984—1988年)

「英語研究会」での屈辱

私が英会話を勉強するようになったのは、偶然のことだった。大学受験で3浪をしていたので、就職が難しいのではないかと考え、「英会話」ぐらいはモノにしたいという安易な気持ちが出発点だった。広島大学総合科学部は、特殊な時期の6月に入学試験があり、夏休みを使って前期を終えた。そして、後期から英会話クラブ（英語研究会=ELC）に入部して、英会話を学びたいと考えた。

浪人時代、英語の偏差値は常に65以上取っていたので、自分は英語ができると思っていたが、実際は、文法や英文解釈だけができただけで、生まれて21年間、英語の発音をしたことがまったくなかった。そんな私が「英会話」に熱心な1年生と2年生からなる英語クラブに入ったので大変だった。ELCの活動は、9時10分の授業始まる前の30分、2年生の先輩が『アメリカ口語教本』を使って、1年生を指導してくれていた。そして、昼休みの45分ほど、図書館の芝生に部員が集まり、先輩と後輩で「NHK英会話」をテキストとして学び、その後フリートークをするという活動をやっていた。午前中の先輩による指導は、受け身的に参加しているだけで、普通に高校の授業を受けているような感じだった。しかし、昼休みになり、フリートークの時間になると一言も英語が話せず、ペアになった同級生（3歳下）や先輩（2歳下）の話している英語を聞くだけで精一杯で、ほぼ一言も話すことができなかった。そんな私のことを「塙田君は言語障害ですか」と率直な感想めいた皮肉を言われたり、「どうして、こんなクラブに入ってきたんですか」とも言われたこともある。当時の私はそれほどまでに英語が全く話せなかった。話せないことの屈辱を毎日味わいながらもクラブ活動に参加していた。

大学の授業が終わった部活の活動は、2年生のリーダーの下、グループでディスカッションをするというもので、週に4回、2時間ほど行っていた。テーマが決められてディスカッションしたが、たぶん、その活動の2時間、ほとんど一言も話せず、毎日座っていただけだったと思う。それでも辞めなかつたのは、浪人を3年以上していた自分には「何かを途中で辞めるという選択肢」はなかったからだったと今振り返れば思う。1年の終わりにグループで合宿をした時に、リーダーの先輩が丁寧に「th」の発音、LとRの発音の違い、Universityという発音の ver=バーという発音の「アー」は、日本語の「アー」とは違うことなどを個人的に教えてくれ、発音に注意して発音しないと英語にならない、とアドバイスをくれた。

どこの大学にでもある ESS という英語会話クラブとは違った英語研究会は先輩たちが1年生の時に創部したクラブだったが、2年生の終わりに、「私たちは英会話は卒業して、これからは大学の専門研究をする」と言ってほぼ全員が部活を辞めていった。残されたのは1年生部員だけで、翌年度から2年生になり新しい部員をリクルートしなければ、部活を続けることができないという危機感が部活の中にあった。しかし、個人的には、英語で一言も話せない私は、「新しい1年生が入ってきたら恥をかく、どうにかしなければ」と思って焦っていた。

その当時、NHK のテレビで「中級英会話」(Talk Show) という番組があった。その英会話講師をしていたのが國弘正雄先生であった。下宿先にテレビはなつたが、友達の部屋での NHK 中級英会話の番組を聞いた時は衝撃だった。NHK のラジオの英会話とはまったく異なり、日本人である國弘先生がアメリカ人の大学教授などと自由に英語で討論している30分。その内容は難しくさっぱり理解できなかつた。そこでその内容がそのまま掲載された「NHK 中級英会話テキスト」に書かれた英語を読み、その内容の難しさを実感しながら、辞書を使いながらどうにか読み解くことができた。國弘正雄という人物はどのような人物かを調べてみたら、アポロ11号が月に着面した時に、月から送られてきた衛星中継を同時通訳した人ということだった。その衛星中継は、高校の時見ていたものだった。そこで同時通訳していた人物は、國弘先生と西山千という人物だった。大学生になり知つたことであるが、西山千はアメリカ生まれの日本人で英語がネイティブと変わらないという印象だったが、國弘先生の英語の話し方は、ネイティブのものとは異なり、自分でもまねすければできるのではないかと思った。そこで、國弘先生の『英語の話し方』という本を見つけ、その方法で「日常的な英会話ではなく、ディスカッションのできる英語の話し方」をマスターしたいと思った。

「只管朗読」を実践して

國弘先生の『英語の話し方』のメッセージはただ一つだった。「只管朗読」を実行すること。ある程度まとまつた英語をただ大きな声で朗読すること、ということだった。國弘先生曰く「短文を読むのではなく、ある程度まとまりのある文章の意味を理解した上で、覚える

意識なしに、ただ大きな声で音読することで、そこに書かれている英語が自分の体の一部になり、口をついて出てくるようになる」ということだった。國弘先生によれば、中学1年生から3年生までの教科書には基本的な英語文法が入っているので、中学校の3年間の教科書を只管朗読すればよいということだった。國弘先生の場合は、中学校の1年から3年の教科書を500回読んだということだった。中学の3年間の教科書を読むということの重要な意味は分かっていたが、私の場合、その時クラブ活動で使っていた『アメリカ口語教本一中級』を只管朗読することを決めた。この英会話教材には、まとまった内容の250単語ほどの文章と二人の人の対話の英語表現が150単語で書かれていた。それにその本文の英文がネイティブ・スピーカーによって読まれたカセットテープが付いていた。Lesson 1からLesson 19だった。250単語のエッセイの英語19回分、それに150単語の対話文を覚えることを意識せずに大きな声で読み続けること。これが私の初めての英語学習だった。考えてみれば、7600単語（重複もある）を覚えることもなく500回読み続けたことになる。

2月から3月の2か月間は朝から夜まで時間の許す限り、只管朗読を実践した。具体的な方法としては、まず、Lesson 1 のカセットテープを何度も聞き、英語のリズムを感じることにした。そして、できるだけ、英語に聞こえるようと、最初は英語発音記号なども確かめながらゆっくりと正確な発音をすることにしていた。部活で少しは英語を発音していたが、一人で英語を発音することは生まれて初めてのことだったので、Lesson 1 を正確に読めるようになるまで相当の時間をかけた。最初はゆっくりだけれど、それを10回以上続けると少しづつ早く読めるようになった。そして、50回ほど超えると自分なりに英語を読んでいる気分になり、苦痛だった読みが楽しくなったのを今でも思い出す。読んでいるうちに、カセットテープのリズムを思い出し、気持ちを入れながら読むことにしていった。特に、二人の対話形式になっているところは会話であることを意識して、気持ちを入れて読んだ。あまりにも同じLessonを読んでいると飽きてくるので、100回ほど繰り返した後は、次のLessonに進んだ。

このテキストの良いところは、Lesson 1 で習ったことがまた、のちのlessonに繰り返されて出てくるようになっていたことだった。まったく新しいLessonに進んだという感覚よりは慣れ親しんだ表現が出てくることに喜びを感じていたと思う。親からの仕送りなし生活で家庭教師で生計を立てていたが、その家庭教師のアルバイト以外は、キッチンも風呂もない薄暗い下宿先の4畳半の部屋に閉じこもり、時間の許す限り、大きな声で音読をしていた。その原動力になったのは、「新しい1年生に恥をかかないようにしたい」という一念だけだったと思う。この2か月でたぶん、500回ほどは読んだと思うが、具体的に何度読んだか記憶はない。

ただ、私の中で英語を話すことに対する態度が大きく変わった。何度も音読した表現がふと頭に浮かんだ時、その表現を使って英語で表現できることがあることが時々あった。感覚としては、覚えることを意識せず音読した英語表現が、自分の頭の中に沈殿していく感覚だった。21年間、英語を一言も発音したことのなかった私にはまさにぴったしの英

語の学習方法だったと今振り返って思う。

さて、2年生になり、指導することになった私には、授業前に行なった30分の時間は楽しいものだった。先輩として1週間、特定のlessonを教えたが、教える前に楽しくなるほど読み込んでいたので、それを表現することはたぶん、楽しいことだったのではないかと思われる。また、昼休みのラジオ講座「英会話テキスト」を使った英語会話の練習のために、あらかじめ読みこみ参加していたので、テキストに書かれていた英語は正確に発音することができていた。さらに、テキストを用いた英会話レッスンの後のフリートークでも、春休みに覚えた表現を使えば、自分の言いたいことを英語で言うことが出来始めていた。そのように私が英語を話していた姿にいろいろな同級生たちが、「塚田君、どうしたんですか」と驚いて言っていたのを聞いて、1年生の時に味わった屈辱の一部が消える思いであった。それに一つ気づいた点は、昼休みの英会話の練習では、先輩と後輩がペアを組むというのが習慣だったので、必然的に、私は1年生とペアを組むことになった。1年生の時には、先輩はすでに英会話の部活で1年半以上も活動しており、すでに「ペラペラ」話している状態だったので、私は聞き役にならざるを得なかった。同じように、高校の時ある程度英会話を学んできた1年生は、先輩である私の話す英語の聞き役になってくれた。先輩が話すからという心理的なものが働いていただろうし、私自身の自分の英語表現を使って話したいという気持ちが強かったことが相互に働き、必ずしも正確な英語を話していたわけではないが、1年生よりは多く発言することで、英会話することが楽しくなったのを覚えている。今そのことを振りかえると、高校時代の柔道部での経験を思い出す。柔道部では1年の時には怪我をしないように、まず、受け身の練習をする。1年生は、習いたての受け身をすぐるので、2年生は投げることがどんどんうまくなるという傾向があった。私自身、体もそれほど大きくなかったが、少し柔道が強くなってから、積極的に攻めるようになり、投げ方を覚え、1年生の末に初段をとることができたが、1年生の夏までは、2年生に投げられるだけだった。この柔道での経験からすると、2年生になり英語らしきものを話せば、聞いてくれる後輩との練習で、より多く英語を使うことによって、英語会話力が伸びたように思える。

放課後の部活は、2年生がリーダーになりグループを作り練習していた。私は、「ディスカッショングループ」のリーダーになり、國弘先生の「中級英会話のテキスト」と「録音されたカセットテープ」を使ってディスカッションをしていた。私のグループは6~7人のグループでの活動で、中級英会話のテキストの内容を踏まえて、リーダーである私がテーマを決め、ディスカッションをした。そのころから、shadowingとして、中級英会話の音を聞きながら、それをそのまま繰り返すという練習も行っていた。そのようなディスカッショングループでリーダーになっていたことで、この時もまた、「他のメンバーに恥をかかないように」と、中級英会話のテキストをあらかじめ音読したり、ディスカッションテーマについてあらかじめ予習して臨んだいたことが英語学習を加速させたことにつながった。

そのような部活の活動をしながら、『アメリカ口語教本一中級』を音読するだけではなく、『アメリカ口語教本一上級』も自宅で音読をしていた。その当時、英検1級を取ることが部

員の目標だったので、1級を目指す2年生が一緒に上級を勉強していた。広島県で毎年英検1級の合格するものが5~6人程度であったが、3年生になる頃には、私たちの英語研究会の数名が1級に合格した。「英語研究会」は英語教育を専門として、英語が好きだった学生たち集まりだった。

2年生になって大学での授業を受けた時に、「只管朗読」の効果が英作文に見られた。『アメリカ口語教本』のエッセイを音読したこと、基本的な英語表現が頭の中に自然に浮かぶようになったので、英語を書く時にも、頭に浮かぶ文章の構造をそのまま使って、単語を入れ替えるだけで自分の言いたいことは英語で書けるようになった。英語を教えてくれていた教授が「塚田君の英語は簡単だけれど、全く文法的に間違いのない文章ですね」と言って評価してくれた。英語で文章を書くには、「借文」をすればよいということを英語学習の本で読んだことがあったが、まさに、その方法を実践していた。のちに大学4年生から5年にかけて、ミシガン大学に交換留学で行ったが、英語を書くこと自体には問題を感じることはなかった。

ミシガン大学への交換留学へ

國弘先生の「NHK中級英会話」のレベルのディスカッションができるようになりたいと思った時、アメリカ留学をしたいと思い、広島大学が協定していたミシガン大学への国費給付型奨学金制度（1975年に創設された）に応募したいと考えていた。10月のある日2年生の後期に、留学担当の先生のところに行って相談した。その先生に成績を聞かれたので、自分の成績表を見せたところ、「留学試験に応募する以前の問題だね。GPAが2.4以上ないと受験資格ありません」と言われた。留学したいと思っていた私は、その先生に「これから1年間Aを取り続けたら、どうですか」と尋ねたところ、その先生は電卓を取り出し「まあ、どうにか2.4を超えるから、頑張りなさい」と言ってくれた。今まで成績Aをあまり取ったことはなかったが、それからの2年生の後期と3年生前期まで1年間履修したすべての科目でAを取り続け、受験資格を得ることができた。

当時の広島大学は文部省の教育改革推進大学で、国際化を推進していた。1975年に創設された国費給付型の奨学金制度ができた時に、東京大学、京都大学に続き、留学可能枠として3名が割り当てられていた。応募資格は、大学3年生から修士課程の大学院生だった。受験資格を得たものの、総合科学部での推薦順位は5人中5位という成績だった。12月に大学独自の留学試験があり、筆記試験、英語での面接試験、日本語での面接試験があった。筆記試験の成績はある程度良く、英語と日本語での面接試験はほぼ満点だったと相談に乗ってくれていた先生から、合格してから聞いた。日本語での面接でなぜ、ほぼ満点を取れたかを振り返ってみると、「ミシガンに留学したい」という強い思いでやっていて、GPAまで上げようとした準備の結果だったと思う。広島大学はミシガン大学と交換協定を持っており、留学試験に合格したらミシガン大学にしか行けなかった。面接試験では「なぜ、ミシガ

ン大学に留学したいのか、何を研究したいのか」などの質問は予想されたので、私は、アメリカ研究を専攻しアメリカの社会制度などについて勉強をしたいと戦略的に答えるつもりで、具体的な研究テーマを考えておこうと、ミシガン大学の有名な教授の書いた『1930 年代のアメリカ保障制度』という 300 頁ぐらいの本 1 冊を読んだ。そして、予想された質問「ミシガン大学で何を研究したいのか」が尋ねられた時、「アメリカ社会はヨーロッパ諸国と異なり、個人主義が特に発達しており、貧困の問題は個人の問題として歴史的に考えられていた。そのことによって、アメリカの社会保障制度は、ヨーロッパ諸国より数十年遅れて制度化されるようになった。社会保障制度からみるアメリカ社会の特性について、歴史学的視点から研究したい」というような趣旨のことを、具体的にその本に言及して答えることができた。まさに準備していた通りであった。9 名ほどいた面接の先生たちが、納得したようにななづいてくれたという印象だった。その印象は間違っておらず、面接でほぼ満点をもらった。英語での面接は、ラッキーな点があった。英語研究会の活動の一環で英語だけで過ごす「英語キャンプ」を行ってそのキャンプに学内のネイティブの先生を招待していた。その招待した先生と日本人の先生が面接官であった。英語研究会で 2 年間ほど、ディスカッションなどを通して練習してきた英語で、最初から緊張もせず話すことができた。「言語障害ではないですか」と言われた私が「只管朗読」を基礎としながら、2 年間、英語を使う練習をしたきたことが実を結ぶ結果になった。

学内の受験者が 27 名いたが、その上位 3 人が留学試験に合格した。ただし、合格しても実際に留学するためには、TOEFL500 点を取得していることが条件であった。当時の私の TOEFL の得点は、450 点ほどだったので、願書を提出するまでに 500 点を取得することが条件とされた。学内で内定合格が発表されたのが 1 月の中旬、それから 2 か月間で TOEFL を 50 点あげる必要があった。当時の TOEFL は今の TOEFLib と異なり、Reading(語彙、文法、読解)と Listening だけだったので、文法問題はある程度できたが、語彙と読解が難しかった。そこで 2 か月間受験勉強をすることにした。当時 TOEFL の簡単な攻略本などは日本語で出版されていなかったので、広島の丸善で売っていた英語の TOEFL の問題集を 3 冊買ってきて、それを徹底的に勉強することにした。3 年間浪人し受験勉強をやってきた勉強法として、傾向と対策を考え実際に出された問題を繰り返して解くことがよいと考えていた。そこで、まず、時間を測り問題をやってみたが、知らない単語があまりにも多く、さんざんな結果だった。そこで、問題集をやって知らない単語が出来たら、タイプライターで打ち出し 100 単語を毎日覚えると決めた。外出する時にタイプに打った 100 単語を持って出て、帰宅して寝る時に、意味が言えるかというチェックした。だいたい半分の 50 単語ぐらいは覚えることができたが、他の単語はできなかった。そこで、覚えられなかった単語 50 に新しく 50 単語を加えて、次の日に覚えた。毎日平均 7 時間の英語を勉強することを自分に課す生活をしていて、40 日後には 3000 語ほどの全く知らなかった単語を覚えることができていた。次に、リスニングに関しては、TOEFL のテキストの listening の部分を毎日何度も聞き直すことを続けていた。聞く時に自分なりに訳を付け、意味が分かった英語を聞

き、内容をマスターするという作業を続けた。最初はあまり理解できなかった文章も英文が頭の中に浮かぶようになり、英語を聞きながら意味が直接わかった気分になった。このような生活は自分が思っていた以上の成果を出すことが出来た。

3月の TOEFL を受験する締め切りが終わってしまったので、ミシガン大学の留学担当の教授（日本人）に手紙を書き、事情を説明したら、TOEFL の代わりとしてミシガンテストを受験することでよいという返事をいただいた。広島大学には、ミシガンテストの試験専門委員もあり、筆記試験とその先生の面接を受けた。そのミシガンテストの得点結果が何点だったはわからなかったが、予想以上に良かったらしく、前年度までの広島大学の交換留学生に必須とされていた学部授業履修前の 4 か月の英語学校での英語学習が免除され、最初から学部の授業を履修することになった。アメリカ研究を専攻していた私は、アメリカ人の中の唯一の外国人留学生として、大変な日々を送るようになった。ちなみに、実力チェックのつもりで 4 月に受験した TOEFL は 550 点（問題形式は異なるが、現在の TOEFL iBT では、80 点と同等とされる得点）だったので、TOEFL の得点から見ても学部授業の履修基準を越えていたようだった。

英語研究会での英語の勉強で、話すことはある程度でき日常会話ではそれほど問題なく、書くこともどうにかなっていたが、ミシガン大学の reading assignments を読みこなすことが大きな課題だった。特に、American Culture and Values（アメリカ文化と価値観）と American History（アメリカ史）は毎週 100 ページほど読まなければならなかった。最初は、辞書を引いて読んでいたが、まったく進まないので、途中からは辞書を使わず、全体の概略を理解する読み方を始めた。当時のミシガン大学の図書館は午前 2 時まで開いていたが、1 時半になると「まもなく閉館します」の合図として、一時的に電気がすべて消された。その合図を見て、「今日もまたきちんと読みなかった」という思いで、トボトボとキャンパスにある寮まで帰宅するのが日課だった。

それぞれの科目に take-home の試験 2 回、paper が 1 回ずつあった。基本的に書くことには自信があったが、A4 判に 10 枚ほど書く paper はどのように書いてよいかわからなかった。最初の課題は、アメリカ史の授業での 2~3 枚程度の歴史的雑誌の記事についての critical review paper だった。書くことに自信はあると言っても不安になったので、たまたま紹介してもらって知り合った日系アメリカ人のピーター・タナカさんのところを訪ね、添削をしてもらうことにした。ピーターさんは、当時心理学の博士課程の大学院生で、妻のアンさんは白人女性で歴史学の博士課程の大学院生だった。まず、ピーターさんに読んでもった。「う～ん、分かります。でも少し問題あるかもしれませんね・・・」というコメントをくれた。その後、アンさんが読んで「何を言っているかさっぱりわかりません」という厳しいコメントを受けた。その後、夫婦でディスカッションになり、ピーターさん曰く「日本人はこのように書くのだ・・・」と。それに対してアンさんは、「でもさっぱり意味が通じない・・・」と二人だけで長い間、私が書いたペーパーについて話し合ってくれた。ピーターさんは一般的に言われる帰米日系人で、日本の領事館にも勤めていた人で、日本人の考え方、

ものの書き方に精通していたので、私の日本的な文章の意味をそれなりにわかってくれた。アンさんが理解できないと言っていたのは、まず、私のペーパーには topic sentence がなく論理の展開がわからないという点。次に、批判的ペーパーでなければならぬのに、課題とされた雑誌の記事をそのまままとめていただけだった点。「こんなのはペーパーではない」というきついコメントを聞きながら、戸惑っていたところ、アンさんが「明日締め切りなんですね。私が書き直す」と言って、30 分ぐらいで全く新しいペーパーをタイプしてくれた。もう朝方になっていた夜道をトボトボ歩いていた時の気持ちは今でも鮮明に覚えている。アンさんが書いてくれたペーパーと自分が書いたペーパーを何度も比較し、何がどう違うのかを長い時間かけて点検した。1か月後に同じようなペーパーの課題があったので、また、添削をお願いするために、ピーターさん夫妻のところに行って、書いたペーパーを読んでもらった。ピーターさんが一言「オーケー」と。続いて読んでくれたアンさんも「これでいいわね」と。「次回から大丈夫ね」と二人に言ってもらえた。この経験から学んだこと、基本的なパラグラフライティングとして、まず、まとめとしてトピックセンテンスを書き、その内容を展開し、パラグラフの最後に展開したまとめを書くということ。英語で書くことで初めて学んだことだった。次に、アメリカの大学では、要約やまとめをするだけでは、良いペーパーとは言えず、批判的分析が書かれないとペーパーとして A は取れないということもこの時に学んだ。その後はハワイ大学大学院で最初の社会学理論（成績が発表されてから読み直したら、2~3 行に一つのタイプミスあり、当然の成績だった。ただ内容的には今読み返しても A のペーパーであると思えるので、残念だったと今更に悔やまれる。）で 1 回 B を取った後はすべて A を取り続けることができたのは、この時のピーターさんとアンさんの英語の書き方の指導があったからだと今でも思っている。

秋学期は授業で苦しんだが、冬学期は、余り苦しんだ記憶はほとんど記憶にない。ただ、アメリカ人だけのクラスの唯一の外国人留学生として、グループディスカッションで一言も発言することはできていなかった。T.A.がリーダーを務めていたグループディカッションの授業で突然、T.A.が「今日の take-home exam は成績の良い順番に返却します」と言って答案を返し始めた。十数名いたクラスだったが、2 番目に私の答案が返却された。成績も 80 点以上だった。それまで全く発言できなかつた私だったが、その成績に自信を持ち、そのテストの返却を機に発言するようになった。T.A.もまた、「日本人としての比較文化的視点から何か意見ある？」と自主的に発言しなくても指名してくれるようになり、ほぼ毎回発言するようになった。「透明人間」のように、存在する認知されていなかった自分が認知されたと感じ、授業が楽しくなった。

冬学期の後、2 か月の春学期も 1 科目だけクラスを履修した。400 番台レベルで大学院生も半分以上いたクラスの Anthropology of Region だった。1977 年頃のミシガン大学には、英語学校で学んでいる学生は多かったが、正規の学部生はほとんどいなかった。そこでうわさされていたことは、「学部でどうがんばっても日本人には A は取れない」というものだった。このクラスでは、自国にはない宗教を人類学的手法のフィールドワークをして、ペーパ

ーを書くということが課題であった。日曜日の朝にテレビで見ていた福音主義の牧師の説教に文化の違いを感じ、そのテーマで書くことをペーパーの課題とした。授業担当の教授から紹介を受けた牧師さんにインタビューしたり、日曜日の礼拝を観察したりするフィールドワークを行った。文献も読み、生まれて初めて 25 頁ほどのペーパーを書いた。A を取りたいと思っていたので、一緒にコーオプクッキングのグループ（食費を安くするために、6人の学生で輪番制で食事を作っていたグループ）をしていたアメリカ人の女性でジャーナリズム専攻のジャッキーに読んでもらった。彼女の読んだ後の一言は、“Neat！”というものだった。Neat と単語をこんな文脈で聞いたことがなかったので、調べてみたら、「うまくまとまっている」ということだった。「これで A 取れますか」とジャッキーに聞いたら、Of Course! と答えてくれた。それまでも A- は取ったことがあったが、このクラスでの A がミシガン大学での唯一の A だった。このことは大きな自信になった。

ただ、ケネディー国際空港で帰国の途についた時の気持ちは、「1 年間頑張ったけれど、いつも人として半人前だった。もうアメリカなどには二度と来ない。さようなら、アメリカ」というものだった。

広島大学からハワイ大学へ：フルブライト奨学生とイースト・ウエスト・センター奨学生

ミシガン大学での留学生活は苦しかったが、学ぶ喜び、分かる喜びを知った私は、もう少し勉強したいと思い、大学院進学を考えた。広島大学大学院アメリカ研究専攻に入学し、2 年間修士課程で勉強したが、ミシガン大学で感じた学びの喜びを感じることができなかつた。そこで、もう一度アメリカの大学院に専門科目を社会学に変えて留学することを決心した。幸運なことに、1980 年にフルブライト大学院奨学生に応募し、旅費と一部支給という枠で合格し、同時に、ハワイ大学社会学部の T.A. として大学院生フェローシップ(授業料免除と T.A. としての給与が毎月 460 ドルほどあった)を受け取ることができた。1980 年代のアメリカの経済も良く、外国人留学生で修士課程の私でも初年度から T.A. をもらえることができた。3 年間の T.A. を経て、1984 年から 1988 年、連邦政府の研究所であるイースト・ウエスト・センターのグランティー（大学院奨学生）として、ハワイ大学の博士課程の大学院生として学びながら、センターの活動にも参加した。1988 年社会学で博士号取得後、イースト・ウエスト・センターのプロジェクト CTAPS (Consortium for Teaching Asian and Pacific Studies) に Post-doctoral Intern として日本での就職が決まるまで 1989 年 3 月まで働いた。

今振り返ってみると、英語の基本的な学びについては、広島大学の英語研究会での学びとミシガン大学での学部の授業履修でほぼ終わっていたように思える。しかし、その後、ハワイ大大学院のセミナーでの学問的なディスカッションや 1 科目につき 20~30 ページの Term-papers を執筆する苦労は大変だったが、ほとんど問題なく終わったように思い出される。ただ、29 歳から始めた新しく専攻した社会学についての専門知識や大学院レベルの

アカデミック・ライティングについては、毎回 term paper を書くことで身に付けていたように思える。そして、Comprehensive Exams で専門 3 分野（社会学理論、社会学方法論と統計、博士論文テーマに関する専門分野）を受験するために 1983 年から 1984 年にかけて準備する過程で他の大学院生と定期的に勉強会を開きディスカッションすることで、基本的概念や理論などを明確に理解することができた。1984 年の秋学期に受験した Comprehensive Exams は月曜日、水曜日、金曜日の 3 日間、それぞれ 3 時間、教室内で受験する筆記試験だったが、その答案としてブルーノート（A5 判のノート）に 20 頁以上書き、すべての科目で合格することができた。たぶん、私の書いた答案には、小さな英語の間違いがあったであろうが、書かれた答案は十分であると判断された結果であったのである。

Comprehensive Exams 後、博士論文のプロポーザル審査を受け、1985 日本に帰国し、広島の予備校で 1 年間のフィールドワークを行い、1988 年に博士論文 330 頁を書いた。最終的には、同じ博士課程の友達に英語のミスを点検してもらい提出し、書き直しもなくそのまま博士論文として提出することができた。その後、1991 年に博士論文を大幅に書き直し、*Yobiko Life: A Study of the Legitimation Process of Social Stratification in Japan* として、カリフォルニア大学バークレイ校の The Institute of Asian Studies から出版することができた。その本を読んでくれた *Qualitative Sociology* の著者の一人で、博士課程の時にハワイ大学に客員教授としてフィールドワークについての授業を教えてくれた Jerry Jacobs 教授がのちにその本を読んで、「そんなに難しい英語ではないけれど、アメリカ人よりもわかりやすく読みやすく書かれていますね」とコメントをくれた。そのコメントが聞いた時、広島大学の 2 年生の時の英語の教授が、「塙田君の英語は簡単だけれど、全く文法的に間違いのない文章ですね」とコメントしてくれたことを思い出した。そのように振り返ってみると、私の英語力のすべて基礎は、1 年生の春休みに國弘先生のやり方をまねした『アメリカ口語教本一中級』の只管朗読によって作られたのではないかと言ってもいいのかもしれない。

体験的英語学習法のまとめ

英語の学習体験を自分の留学体験と関連させて書いた。ここでこれから英語を勉強したいと思っている学生の人たちに伝えたいメッセージがあるとするならば、「21 歳時に初めて英語を発音した私でさえ、アメリカ人を含めた外国人とある程度対等に英語で議論できるようになったので、だれでも決心すれば、英語ができるようになる」というメッセージになる。そして、私自身が英語の師として憧れた國弘正雄先生の提唱した「只管朗読」は、極めて効果的な英語の学び方だと言いたい。ミシガン大学に留学する前に、國弘先生に「ファンレター（10 頁以上の手紙）を書き、留学から帰国した翌年広島県の三次で開催した英語研究会の「英語キャンプ」に國弘先生を招聘し、先生と英語でのパネルディスカッションを行い、先生が NHK 中級英会話でやっていた Talk Show と再現したことは、私の英語学習の中

の最も心に残る記憶である。

今残念に思うことは、「只管朗読」によって英語の話す能力と書く能力がつくから、やつてみてはどうかと、勤めている大学で宣伝するが、誰もそれを信じてやる学生がいないことである。同じテキストを 500 回以上繰り返して音読するこの勉強方法は、「巨人の星」が好まれた昭和時代の英語学習法で今の学生にはなじまないのかもしれない。

広島大学の学部、大学院時代の英語の学習について振り返ってみると、私の英語学習のほとんどは英語研究会という英会話クラブの活動がほとんどで、英語は自分で学んできたと思っていた。広島大学での英語関連の授業でそれほど多くのことを学んだ記憶はない。しかし、履修した英語での授業を思い出してみると、広島大学の総合科学部では私が 2 年生の頃から、アメリカからフルブライ特交換客員教授（広島大学の日本人教授もフルブライターとしてアメリカに行っていた）が来て、アメリカ研究やアメリカ史の学部レベルの授業を英語で教えていた。そのような授業は、明らかにアメリカ留学への動機付けをしてくれた。また、余り好きになれなかった日本人教授によるアメリカ文学、アメリカ史、アメリカ文化論などもアメリカの大学で授業を受けたり、アメリカ人と話したりする時に、アメリカ人の常識を共有することができるという点で役立っている。さらに、アメリカ人の客員教授の日常的な世話は、私が属していたアメリカ研究専攻で行っていたが、7人の学生の中で唯一英語が少しでも話せたのは私だけだったこともあり、英語研究会のメンバーも交えて、そのような先生方とその家族と 2 年間交流したことは英語を伸ばすいい機会になっていた。このエッセイを書くまで忘れていたが、ミシガン大学留学後も大学院レベルで社会学の 2 人のフルブライ特客員教授が来て、大学院セミナーを教えてくれた。そのようなセミナーへの参加は、ハワイ大学大学院の社会学研究科への良い準備になっていたと思う。「私は、広島大学から何かを学んだ記憶はない。すべての学びはミシガン大学とハワイ大学大学院での勉強だった」とと思っていたが、偶然入学した広島大学に国費給付型の奨学金の枠があり、フルブライ特の交換客員教授が英語でアメリカの大学レベルの授業をしていたことなどがあり、実際は広島大学からの多くの恩恵を受けていたと今回気づき、今更であるが、感謝の気持ちが出てきた。

名古屋フルブライト・アソシエーション 2019 年度総会（7月 20 日（土曜日））

報告

1. ホームページの更新など。
2. 評議員会
3. 英語学習・留学体験記
4. その他

議題

1. 2018 年度（2018 年 4 月—2019 年 3 月）の事業報告
2. 2018 年度の決算報告と監査
3. 2019 年度の事業計画、予算案
4. その他

1. 2018 年度（2018 年 4 月—2019 年 3 月）の事業報告

開催日程 2018 年 7 月 28 日（土）台風のため急きよ 10 月 13 日に延期

場所：相山女学園大学学園センター 5 階 507 <http://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/access/>
総会：午後 3:00～3:30

講演：午後 3:30～5:00

懇親会：午後 5:00～7:00 (3000 円を予定) 場所は未定

講師：木下徹 名古屋大学大学院人文学研究科 教授

(カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校、1989-91)

テーマ：「脳科学と言語教育：脳画像イメージングの応用を中心に」

日程の変更にも関わらず、15 名の参加者があった。

2. 2018 年度の決算報告と監査

別紙 1 を参照

3. 2019 年度の事業計画、予算案

別紙 2 を参照

別紙 1

名古屋フルブライト・アソシエーション

2018年度決済

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
前年度繰り越し	0		総会案内（85人） 2018年7月	23,256	
		電報料		1,814	
会費	93,000	3000×31人 講師謝金	サーべー・ドメインと更新 The Fulbrighter in Nagoya no.28 (5冊) 帽山女学園	0 37,908 10,000 1,500	
		学生アルバイト（5000×2）		10,000	
			次年度繰り越し	8,522	
計	93,000			93,000	

2018年度収支決済について、領収書、預金通帳等関係書類によつて監査を行つた結果、適正である事を認め、ここに報告します。

監事
小坂敦子

2019年7月20日

別紙2

名古屋フルブライト・アンシェーライフ

2019年度事業計画予算

収入	金額	摘要	支出	金額	摘要
前年度繰り越し	8,522		総会案内（7月20）	21,816	
会費	90,000	3000×30	講師謝礼	5,000	
			サーバー・ドメインと更新 ニユーズレターの発行29号	37,908	
			会場費	10,000	
			学生アルバイト	1,800	
			通信費	10,000	
				5,000	
次年度繰り越し					
				6,998	
計	98,522			98,522	

名古屋フルブライト・アソシエーション会則

制定 1983年10月 1日

改正 1993年 6月 5日、2009年 5月30日、2012年10月14日

第1章 総則

第1条 本会は、名古屋フルブライト・アソシエーションと称し、英文を Nagoya Fulbright Association と称する。

第2条 本会は事務所を名古屋に置く。

第3条 本会は、会員相互の親睦を図り、会員の経験、情報をもとに、より一層の啓発を図り、日米親善および相互理解を増進することを目的とする。

第4条 本会の会員は、正会員、準会員、賛助会員、名誉会員、シニア会員とする。

第5条 1. 正会員：ガリオア・フルブライト奨学金のグランティー

2. 準会員：フルブライト奨学金のグランティーで日本に滞在しているアメリカ人

3. 賛助会員：本会の目的に賛同し、役員会の承認を得た者

4. 名誉会員：正会員のうち、本会に特別の貢献をし、役員会の承認を得た者

5. シニア会員：正会員のうち、本人の申し出があり、役員会の承認を得た者

第2章 事業

第6条 本会は次の事業を行う。

1. 会員相互の交流、親睦を深めるための活動

2. フルブライトその他の奨学金を受けて渡米するグランティーへの指導、援助

3. 日本に滞在するフルブライトグランティーの研究活動 および滞在中の生活への
指導援助

4. その他日米相互理解を深めるための活動および役員会で必要と認めた事業

第3章 総会

第7条 総会は毎年1回開催する。その他役員会で必要と認めた時には、臨時総会を開催する
ことができる。

第8条 総会では、次の事項を行う。

1. 事業報告、収支予算、決算の承認

2. 役員の選出

3. その他の本会運営のための重要事項の議決

第9条 議決は出席正会員の過半数をもって成立する。

第4章 役員

第10条 本会には、会長1名、副会長若干名、幹事若干名、監事を置く。

第11条 任期は2年とし、役員の再選を妨げない。

第5章 会計

第12条 本会の運営資金は、会費および寄付その他の諸収入をもって、これにあてる。

第13条 正会員の年会費は 3,000円とする。

名誉会員およびシニア会員のうち申し出があった者は、年会費を免除される。

賛助会員（法人）は1口 年 10,000円とする。

賛助会員（個人）の年会費は 3,000円とする。ネットによる連絡を希望する場合には 終身会費
10,000円とする。

第14条 本会の会計年度は 4月 1日に始まり、翌年 3月 31日に終わる。

編集後記

会報 The Fulbrighter in Nagoya No.29 をお届けします。

目次にありますように、総会当日に行われた近江誠南山短期大学名誉教授による特別講演「フルブライターとしての「社会的発信」：フルブライトを挟んで—英語と私」を第1章として掲載しています。近江先生は、現在も「近江アカデミー」で現職の英語教員、教員志望者、学生などに英語学習の訓練をしてご活躍中です。独自な英語学習を切り開いた人物です。今回の原稿は、講演会の内容に加筆したものです。

近江先生の講演に刺激を受け、フルブライターとしての社会的発信として、名古屋フルブライターのメンバーの3人がそれぞれの体験的英語学習についてエッセイを書き、ミニ・特集として今回掲載しています。世代が異なると英語の学び方がこれほど異なることを読んで感じていただければ、執筆者の一人としては喜ばしく思っています。また、それぞれの体験的学習法を社会に発信し、それが刺激になりフルブライトに応募してくる学生が一人でも出てきてくれればと願っています。

この会報は、会員の皆さんに配布せず、名古屋フルブライターのホームページ (<http://fbandewc-nagoya.jp/>) に貼り付ける形で、だれでも読めることになっていきます。特に、会員の皆様には読んでいただければと願っております。この会報は、毎年1冊国会図書館に送付して、活動を継続的に発信していくつもりですので、今後ともよろしくお願いいたします。

名古屋フルブライター・アソシエーション及び日本イーストウエストセンター中部同友会

会長兼事務局長 塚田 守

2020年3月

役員（2019年～2020年度）

会長・事務局

塚田 守(栃山女子大学国際コミュニケーション学部 教授 1981-83)

副会長

木下 徹(名古屋大学大学院人文研究科 教授 1989-91)

山本恵里子(在野研究者 1998 元栃山女子大学教授 1998-99)

幹事

上田慶一(三重教育文化会館 元相談役 1963-64)

藤本 博(南山大学アメリカ研究センター客員研究員 1977-80)

星野靖雄(筑波大学 名誉教授 1981-82, 1990-91)

Marc Bremer(南山大学経営学部 教授)

加瀬豊司(四国学院大学 名誉教授 1974-76)

伊原 正(鈴鹿医療科学大学 教授 1985-1990)

監事

小坂敦子(愛知大学法学部・国際コミュニケーション研究科 准教授 1986)

川島正樹(南山大学外国語学部 教授 1995-1996)

発行年月	令和2年3月10日
発行	名古屋フルブライト・アソシエーション 〒464-8662 名古屋市千種区星が丘元町17-3 栃山女子大学国際コミュニケーション学部 電話：052-781-5143(直通) 電話：052-781-5291(伝言) Email: info@fbandewc-nagoya.jp or mamoru@sugiyama-u.ac.jp URL: http://fbandewc-nagoya.jp/fb/
印刷	ツゲ印刷株式会社 電話 052-621-2716